

くど 古墳群 II

福岡県宗像町大字福崎所在古墳群・横穴墓の調査報告

宗像町文化財調査報告書

第 3 集

1980

宗像町教育委員会

久戸古墳群Ⅱ

福岡県宗像町大字福崎所在古墳群・横穴墓の調査報告

宗像町文化財調査報告書

第3集



第19号墳出土土圭頭

1980

宗像町教育委員会

序

先の調査報告書第2集と今回の第3集とが、久戸遺跡の全貌を語るものになるわけですが、宗像町内では初見の横穴群を中心とした遺構であり、興味深い調査ではなかったかと思えます。

調査にあたっては、県文化課の酒井仁夫氏をはじめ、関係者の方々に大変なお世話をおかけしました。ここに深甚の感謝を申し上げる次第です。

さて、邪馬台国論争など、古代史研究をめぐる世界は、大変賑やかなようですが、資料発掘や研究も進んで、だんだん、あいまいな部分が捨象され、歴史の真実が明らかになりつつあるのではないのでしょうか。

この報告書が、そうした古代史解明の一資料として役立てば大変幸いです。

歴史への誘いは、現代に生きている私たちの生活や文化の見直しと、未来を眺望する灯を意味するといわれていますが、この書が、多くの人々の歴史学習の教材の一つとして利用されるよう願いたします。

昭和55年3月10日

宗像町教育委員会

教育長 竹原 英

例 言

1. この報告書は宗像町福岡地区土地区画整理事業に伴って破壊される予定の遺跡について実施した第2次発掘調査の結果報告である。
2. 調査は昭和54年度に国庫補助を受けて宗像町教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の援助を得た。
3. 遺物整理については九州歴史資料館の横田義幸氏及び福岡県教育委員会の岩瀬正信氏に指導を願った。
4. 掲載した写真のうち遺構については酒井が、遺物については石丸洋氏の指導のもと、平島美代子君が撮影した。
5. 掲載した挿図は草場敬一・平田春美・豊福弥生の3君が浄書した。
6. 本書は酒井が執筆編集した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
II 調査の概要	2
1. はじめに	2
2. 古墳群	2
1) 遺構	2
2) 遺物	7
3) 小結	12
3. 横穴群	13
1) 遺構	13
2) 遺物	19
3) 小結	24
III まとめ	28

挿図目次

	頁
第1図 第2次調査区遺構配置図(縮尺1/400)	2-3
第2図 第14~18号墳石室実測図(縮尺1/60)	3
第3図 第17~19号墳墳丘実測図(縮尺1/60)	4
第4図 第19・20号墳石室実測図(縮尺1/60)	5
第5図 第16号墳出土紡錘車実測図(縮尺1/2)	7
第6図 第15・16号墳出土須恵器実測図①(縮尺1/3)	8
第7図 第15・16号墳出土須恵器実測図②(縮尺1/6)	9
第8図 第17号墳出土須恵器実測図①(縮尺1/3)	10
第9図 第17号墳出土大刀実測図(縮尺1/4)	10
第10図 第18号墳出土耳環実測図(縮尺1/2)	10
第11図 第17号墳出土須恵器実測図②(縮尺1/3)	11
第12図 第18~20号墳出土須恵器・土師器実測図(縮尺1/3)	11
第13図 第19号墳出土大刀実測図(縮尺1/4)	12
第14図 第1~4号横穴実測図(縮尺1/60)	12-13

第15図	第5号横穴実測図 (縮尺1/60)	14
第16図	第6・7号横穴実測図 (縮尺1/60)	14-15
第17図	第8号横穴実測図 (縮尺1/60)	14-15
第18図	第9~11号横穴実測図 (縮尺1/60)	15
第19図	第12~14号横穴実測図 (縮尺1/60)	16
第20図	第15号横穴実測図 (縮尺1/60)	17
第21図	第16・17号横穴実測図 (縮尺1/60)	18
第22図	第2~4号横穴出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	20
第23図	第3・4・15号横穴出土鉄器実測図 (縮尺1/2)	21
第24図	第5号横穴出土紡錘車及び第6号横穴出土耳環実測図 (縮尺1/2)	21
第25図	第5号横穴出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)	22
第26図	第7・8・15・17号横穴出土須恵器実測図 (縮尺1/3)	23
第27図	第5・13号横穴出土須恵器実測図 (縮尺1/6)	24

図版目次

	本文対照頁
図版1 (1) 第2次調査区全景 (左丘陵は第1次調査区)	2
(2) 古墳群全景	2
図版2 (1) 第14号墳石室	2
(2) 第15号墳石室	2
図版3 (1) 第17号墳石室	6
(2) 第17号墳遺物出土状況	6
(3) 第18号墳石室	6
図版4 (1) 横穴群全景 (東より)	13-19
(2) 横穴群全景 (東より)	13-19
図版5 (1) 第1~7号横穴と第19・20号墳	13-19
(2) 第12~16号横穴	13-19
図版6 (1) 第2号横穴	13-19
(2) 第3~5 A・B号横穴	13-19
図版7 (1) 第4号横穴	13-19
(2) 第5 A・B号横穴	13-19
図版8 (1) 第6・7号横穴	13-19
(2) 第7号横穴	13-19

図版 9	(1) 第 8 A・B 号横穴	13~19
	(2) 第 8 B 号横穴	13~19
図版 10	(1) 第 9・10 号横穴	13~19
	(2) 第 10・11 号横穴	13~19
図版 11	(1) 第 12 号横穴	13~19
	(2) 第 13・14 号横穴	13~19
図版 12	(1) 第 13・15 号横穴	13~19
	(2) 第 16 号横穴	13~19
図版 13	(1) 第 17 号 (1・2) 及び第 19 号(3) 墳出土大刀	9・12
	(2) 第 16 号(4) 墳出土紡錘車及び第 18 号(5) 墳出土耳環	7・8・10
図版 14	古墳群出土土器①	7
図版 15	古墳群出土土器②	9
図版 16	古墳群出土土器③	9
図版 17	古墳群出土土器④	9・10
図版 18	(1) (1) 第 3 号(1)、第 4 号(2) 及び第 15 号(3) 横穴出土鉄鏃	19
	(2) 第 5 号(4) 出土紡錘車及び第 6 号(5) 横穴出土耳環	21
図版 19	横穴群出土土器①	19
図版 20	横穴群出土土器②	19
図版 21	横穴群出土土器③	19
図版 22	横穴群出土土器④	19

表 目 次

	頁
第 1 表 横穴一覧表	24
第 2 表 古墳出土須恵器観察表	25~26
第 3 表 古墳出土土師器観察表	26
第 4 表 横穴出土須恵器観察表	26~27
第 5 表 横穴出土土師器観察表	27

I 調査の経過

第2次調査は昭和54年4月24日から国・県の財政的補助を受けて町が事業を開始した。

第1次調査で南側丘陵地の発掘調査を終了し、13基の古墳と石棺2、石蓋土壇1基を確認した。北側丘陵地については当初遺構の存在は考えられなかったが、第1次調査の時点で地権者からの助言があり、古墳の存在が知られたので第2次調査を実施した由である。

まずトレンチ調査を行い、開墾によってほとんど墳丘を失った7基の古墳を発見した。これらの古墳を調査していく中で、下位の標高に当る丘陵斜面には横穴群が存在することが分かり、重機を用いて表土を削いで調査した。その結果計17の墓道よりなる19基の横穴が発見された。

第1次調査において墳丘を持つ2基の横穴を調査しているが、北九州地区においては群在する横穴はこれまで遠賀郡以東であり、宗像の地以西においてそのような墓制は当初予想しがたい状況にあった。かくなる事実を驚きつつ調査を進行せしめたのである。

昭和54年5月24日、隣接する宗像郡福間町で大門古墳群を調査中の同僚上野精志君が写真機影用機が倒壊したため墜落死するというショッキングな事故が発生した。この事故を契機として担当者一同発掘調査を中断し、事故の再発防止に向けて精力を注いだのであった。

一応の策が講じられた後、6月15日調査を再開し、同月23日に全ての作業を終了した。

調査関係者

総括	宗像町教育委員会	教育長	竹原 英
庶務会計	同	社会教育課長	牧田 俊次
	同	社会教育主事	尾山 清
調査担当	福岡県教育委員会	文化課主任技師	酒井 仁夫
調査補助員		高田 一弘	草場 敬一

また実測調査に当っては文化課職員の内小路賀宏・栗原和彦・柳田康雄・井上裕宏・橋口達也・川述昭人・木下修・佐々木隆彦・新原正典各氏の援助を受けた。

II 調査の概要

1. はじめに (第1図, 図版1)

遺跡は東へと伸びる丘陵の南斜面にある。東半の尾根に近い緩斜面には7基の古墳が、西半の急斜面には17基の横穴がある。時代的に後出する横穴は古墳群が占地する範囲を避け、谷奥部に築かれたものである。

古墳は開墾によって墳丘をほとんど失い、石室石材も多く抜き去られ、特に20号墳は石材を完全に失っていた。また14号墳は石室前半部が破壊されていた。出土遺物は17号墳で大刀と須恵器が前室床面から一括出土した。

横穴はほとんどが1墓道1玄室で、2基のみ2玄室をもっていた。玄室の天井部は完存するものは5基のみで、多くは崩壊していた。横穴からの出土遺物は全体に少なかったが、5号横穴の墓道と15号・17号横穴玄室床面からはまとまって須恵器が出土した。須恵器の他には刀子と鉄鏃・耳環・紡錘車が僅かにみられる程度である。

なお、古墳群の各番号は第1次調査からの通し番号とした。

2. 古墳群

1) 遺構

a. 第14号墳 (第2図, 図版2)

墳丘は完全に失われていた。掘り方は奥壁側に若干扇状に広がり、上巾1.7m、深さ90cmを残していた。前側は削平されていた。

内部主体は横穴式石室であるが、玄室の奥半部を残すのみである。S26°Wに開口する。奥巾は75cmと狭く、用材も小さい。床面には角礫を用いて敷石されていた。

b. 第15号墳 (第2図, 図版2)

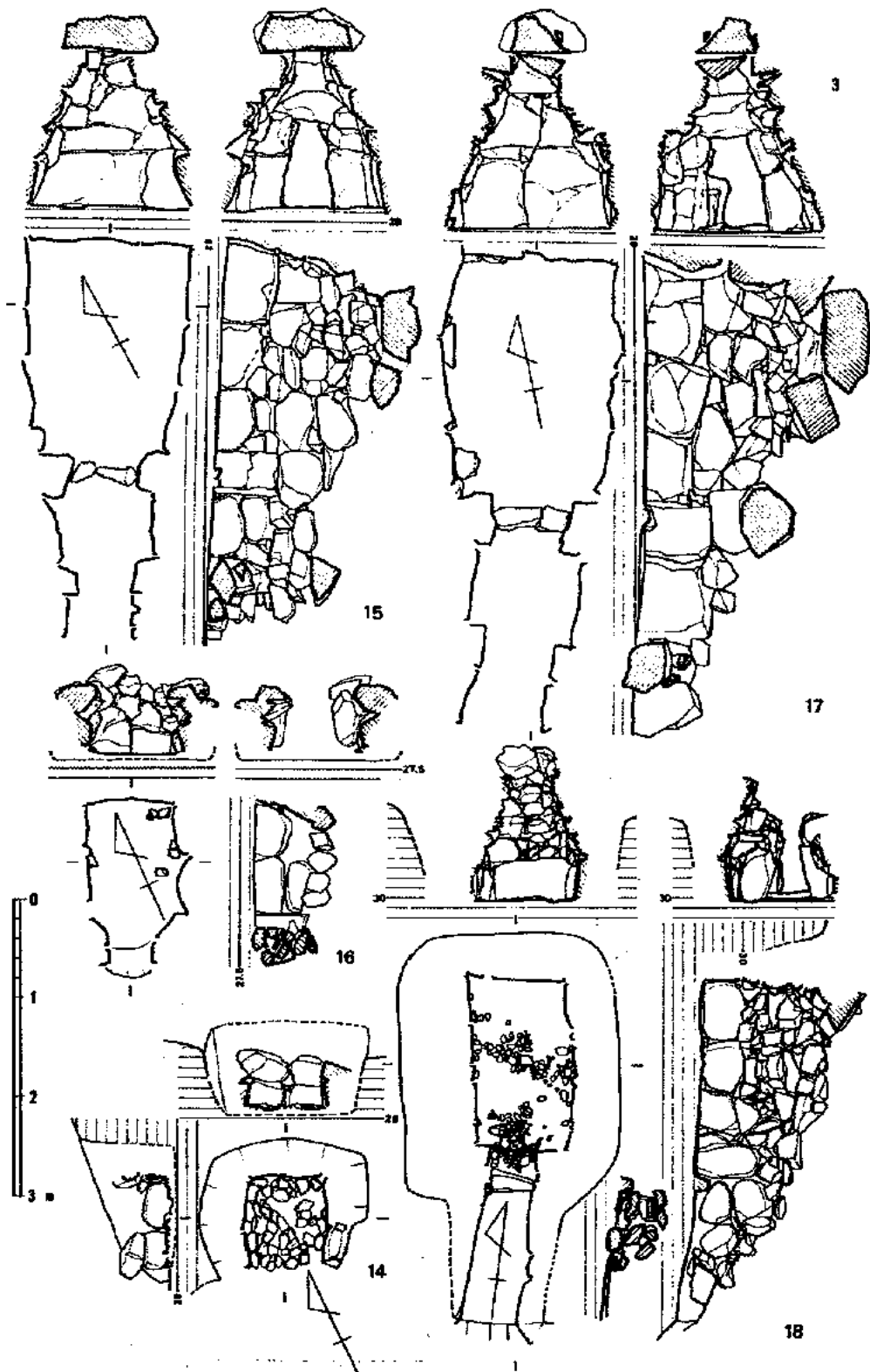
墳丘は西側で僅かに残っていたが、大半は流失していた。

内部主体は複室の横穴式石室でS28°Wに開口する。石室全長は4.1mである。玄室は平面形態が羽子板状に奥巾が広い。奥巾1.62m、前巾1.2m、長さ2.16m、高さ1.6mである。前室は平面の歪みが大いだが、中央巾0.89m、長さ0.66mである。

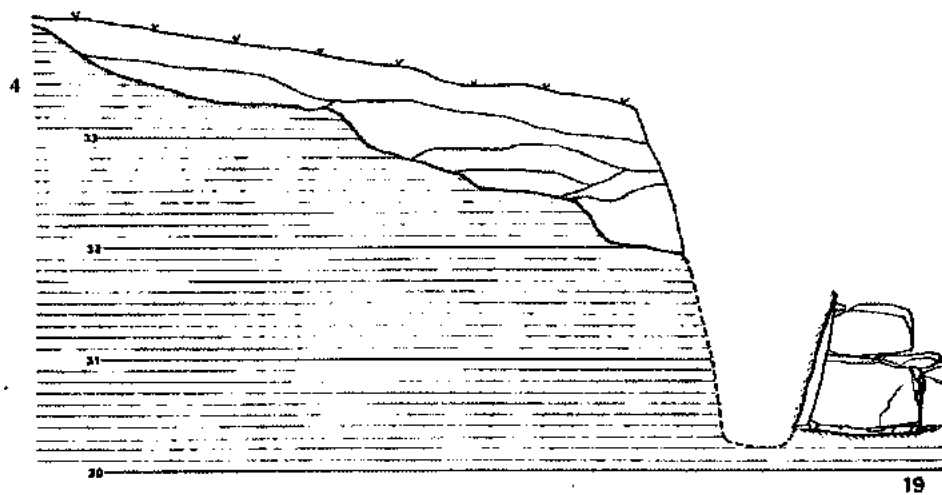
石積み法は粗く、詰め石はあまり用いていない。壁の持ち送りは凹凸が多いが、意識としては腰石からまっすぐ内傾させている。

玄室から羨道部にかけての床面は羨道側へ直線的に傾斜している。

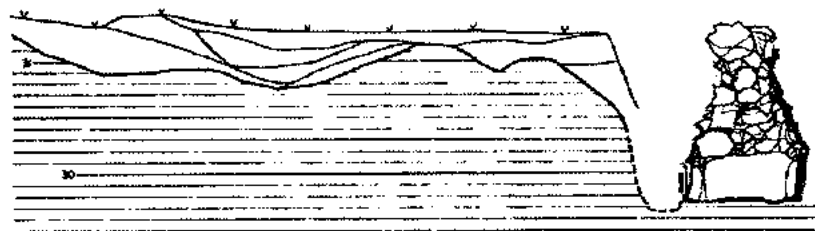
羨道間には閉塞石が基部のみ残っていた。



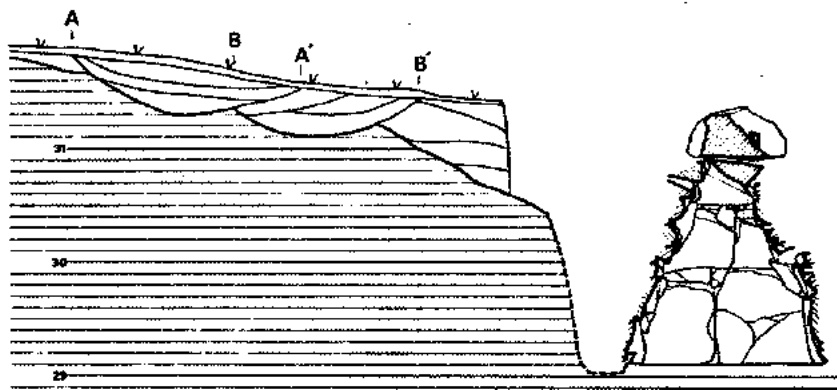
第2图 第14~18号墳石室実測図(縮尺1/60)



19



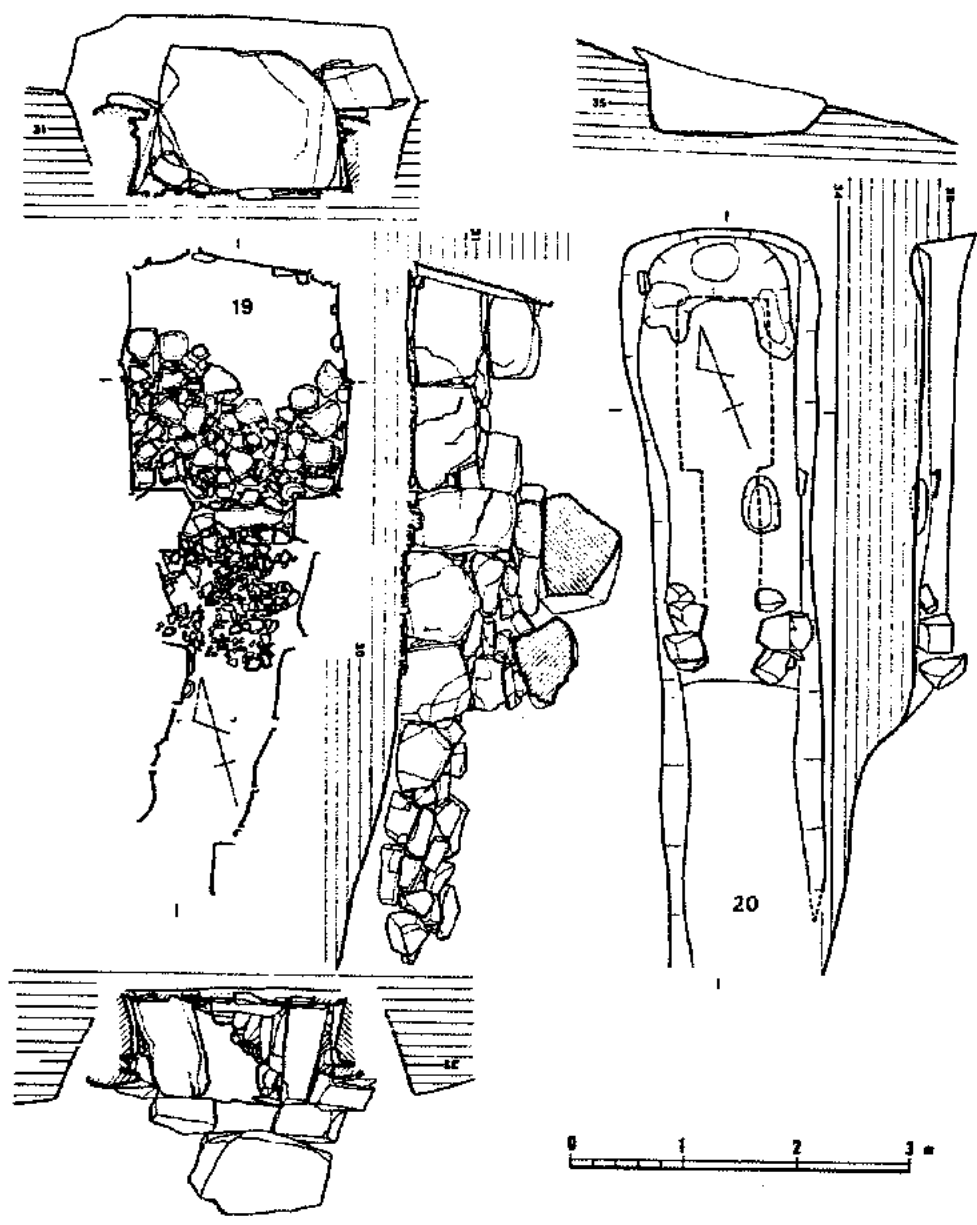
18



17



第3圖 第17～18号墳墳丘実測圖(縮尺1/60)



第4图 第19·20号墳石室実測図(縮尺1/60)

c. 第16号墳(第2図)

墳丘上に標高上位からの流土が堆積していた。墳丘は小礫を多く含む褐色から黒褐色土で築かれており、地山上に最高85cmの高さを残していた。盛土中に須恵器を埋納していた。

南東側に周溝をめぐらしている。

主体部は小形の横穴式石室で、S24°Wに開口する。玄室は長さ1.12m、巾0.84mであるが、袖石が八字状に開くため、より広目の空間にはなる。石積み法は面揃えが粗く、凹凸が著しいが、意匠としては持ち送りは腰石から直線的に内傾させている。羨道部は袖石とその直前に1石を据えただけで短く、長さ50cmのみである。

羨道部間の閉塞石の残りは良く、枕状の20cm大の石を内側に面揃えして積んでいた。

d. 第17号墳(第2図、図版3)

墳丘は西側と北側で僅かに残しているにすぎない。褐色の粘質土を盛っている。墳丘径は6.6m前後と推定され、山側に周溝をめぐらしている。なお、西側の周溝は第18号墳の周溝に切られていた(第3図のAA'間が18号墳周溝、BB'間が17号墳周溝)。

主体部は複室の横穴式石室で、S13°W方向に開口する。玄室は僅かに胴張りし、前巾1.4m、奥巾1.6m、中央巾1.7m、長さ2.4mを測る。床面からの高さは1.8mである。腰石には表面を平滑に加工した石材を用いているが、上部の積み上げは粗く、面揃えも悪い。前室は両壁とも腰石は1石よりなり、方形を呈する。巾1.06m、長さ0.8mである。羨道は長さ1mと短い。羨道間の閉塞石は基礎に厚手の方形石を据え、その上に角礫を山積みしている。

なお、前室からは遺物が一括して出土している。

e. 第18号墳(第2図、図版3)

墳丘は掘り方内部に積み土を残すのみであるが東西に周溝が残っており、径5.4m前後と小さかったものと推定される。

掘り方は深さ1.25mあり、上面で2.7×2.2mの隅丸方形を呈し、墓道へと続いている。

内部主体は単室の横穴式石室で、S8°E方向に開口する。玄室は長さ1.7m、巾1mの長方形プランを呈し、腰石に平滑な石材を用いているため端整である。腰石より上部の用材は奥壁を含めて小振りである。持ち送りは腰石を直立させた上から直線的に内傾させている。羨道部は巾45cmと狭く、羨門より外の石材は腰石も含め、墓道肩部上に載せている。

閉塞石は支切り石に接して積まれ、20cm大の円礫・角礫を合わせ用い、平積みしている。

f. 第19号墳(第4図)

墳丘は径8m前後あったと推定される。盛土は風化した小礫を多く含んだ褐色土である。

掘り方は上巾3.1m、長さ5.5mの長方形プランであり、山側には3段のステップを作り出し、さらに巾2.5mの浅い周溝をもつ。

内部主体は複室の横穴式石室で、S16°Wに開口する。全長は5.6mで、当古墳群中では最も

長い。玄室は1.9×2.0mの方形プランで、床面には角礫を用いて敷石している。腰石は他の石室に比して大振りの石材を用いており、特に奥壁は床面からの高さ1.3mの巨岩を用いている。石積み法は腰石上1段を残しているにすぎないため詳細には知り得ないが、腰石を含め面揃えよく直線的に持ち送りしている。前室は前申が狭くなる台形プランを呈している。床面には奥室に続いて敷石している。天井石が残っており、高さは敷石上面から1.2mである。なお敷石上面は奥室のそれより8cm前後下がっている。石積み法は、奥室のそれに比して粗くなり、石材間の隙間が多い。羨道部は先端に向かうほど小振りの石材を腰石としており、羨門から2石目より外方の石材は旧地表上に築かれている。そのためこの間の石積み上には天井石は架構されなかったと思われる。

g. 第20号墳 (第4図)

3～4層の褐色土を用いて築かれており、径8.2mの墳丘をもつ。

掘り方は玄室奥壁側で1.75mの上巾をもち、羨道まで含めて直線的に伸び、長さ6.4mである。深さは奥壁側でも0.7mと浅い。

石材は完全に抜き去られているが、内部主体は単室の横穴式石室と思われ、S22°W方向に開口する。玄室は石材抜き痕より推定すれば巾80cm、長さ1.6mの長方形を呈すると思われる。羨道は先端部の石材のみ若干残っていた。そのことから長さ1.9m、巾0.5m前後と考えられ、第18号墳と同規模の石室であったと推定される。

2) 遺物

a. 第15号墳出土遺物

出土状況

墓道から5個体の須恵器が、また墳丘中から3個体の須恵器が出土した。墳丘中出土の須恵器のうち2個体は甕であり、墳丘下に据えられ、破壊されたものと思われる。

須恵器 (第6図1～7・第7図1・2, 図版14)

蓋杯・高杯・埴・甕・提瓶・甕が含まれる。提瓶は当古墳群中唯一の出土品である。なお、詳細については第2表 (25頁) を参照されたい。

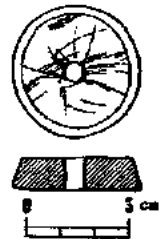
b. 第15号墳出土遺物

出土状況

石室床面から須恵器と紡錘車が、墳丘中から須恵器が出土した。

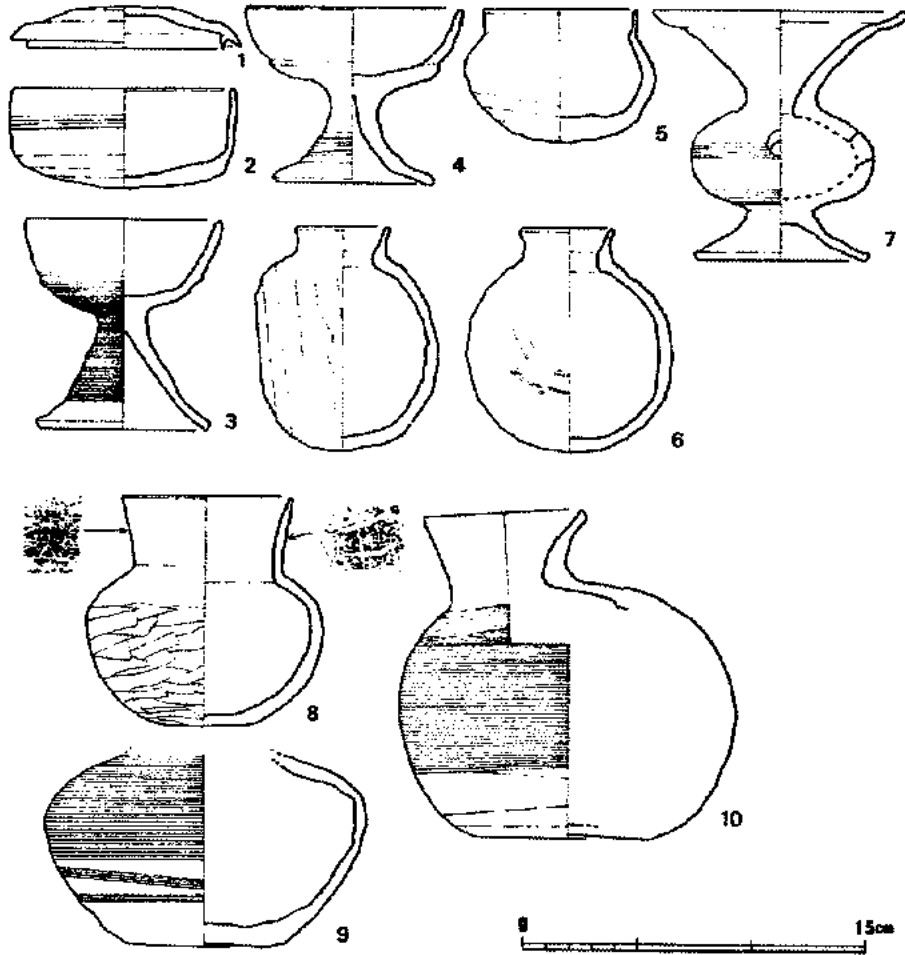
須恵器 (第6図8～10・第7図13・第6図3, 図版14)

8の埴は石室床面から出土し、他の壺・平瓶・甕各1個体は墳丘中の出土品である。8の頸部には内外面共にヘラ記号が刻まれているが、使用した工具は相異なり、外面のそれが鋭いのに対し、内面には巾広の工具を用いている。



第5図

第15号墳出土紡錘車
実測図 (縮尺1/2)



第6図 第15・16号墳出土須恵器実測図①(縮尺1/3)

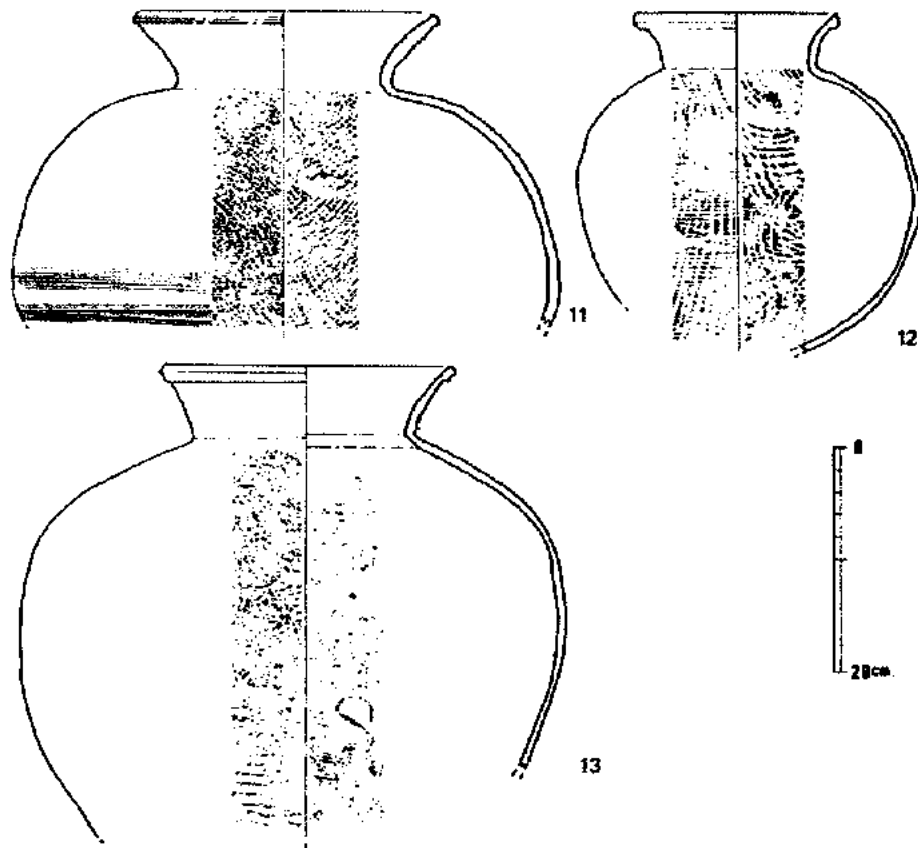
紡錘車(第5図, 図版13)

滑石製品で、重量は29.6gである。長時間の使用により中央孔の周縁が磨耗し、また上下両面共に削痕が甚だしい。

c. 第17号墳出土遺物

出土状況(図版3-2)

前室の床面から遺物が一括出土した。須恵器8個体と大刀2振である。左側壁にそって平瓶2個体と壺1個体が床面に接して出土し、蓋1個体はやや浮いていた。右側壁にそって大刀1振が置かれ、刃部を内側に向けていた。さらに柄部を接して、もう1振の大刀が床面中央部に



第7図 第15・16号墳出土須恵器実測図②(縮尺1/6)

向けて置かれていた。須恵器は壺・高杯・小鉢各1個体が刀に接していた。支切り石の手前には埴と小形壺各1個体があり、小形壺は床面からやや浮いて出土した。

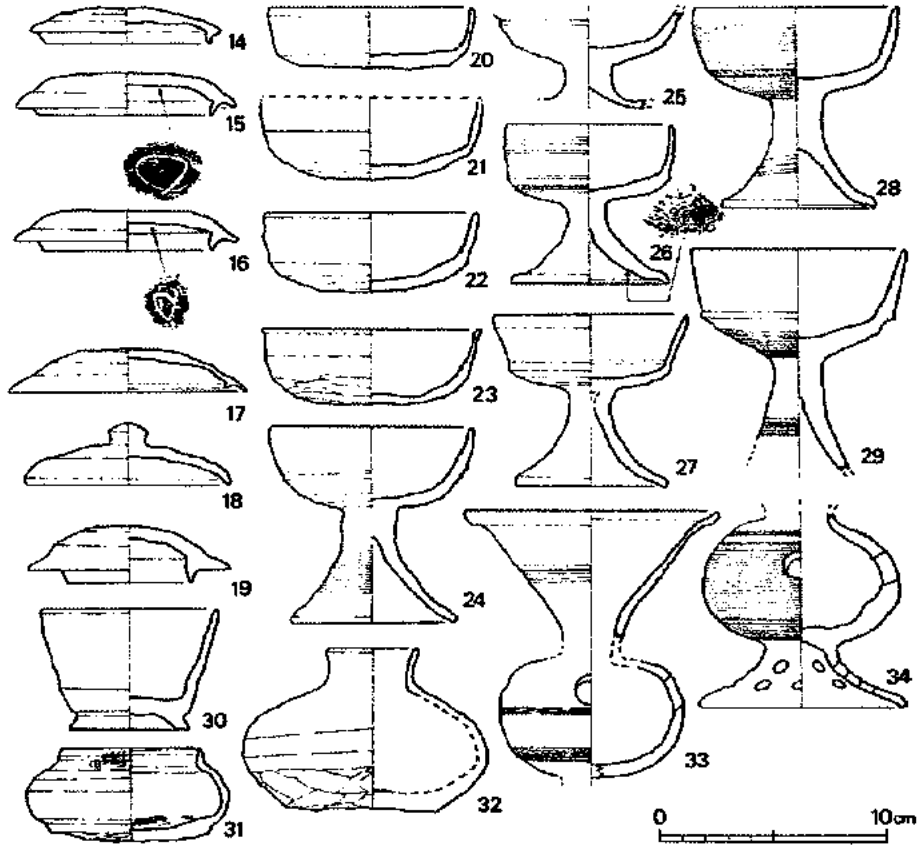
なお、墓道からも多くの須恵器が出土した。

須恵器(第8・9図、図版15~17)

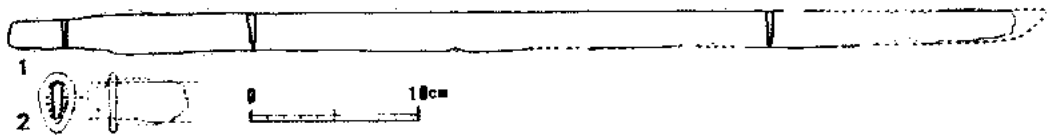
18・28・30・31・35・36・38・39が前室からの一括出土品であり、他は墓道埋土中の出土品である。

大刀(第10図、図版13)

細味の大刀である。2の刀身は発掘後紛失した。1は切先を欠くが、平櫛で全長62cm前後、刀身長55.5cmである。関部巾2.4cm、莖長6.4cm。刀身中央部と鋒に銅が付着しており、鞘装具のうち筒金と鞘尻であると思われる。2は関部のみで、巾2.4cmである。金銅製玩は径2.6×1.2



第8図 第17号墳出土須恵器実測図①(縮尺1/3)



第9図 第17号墳出土大刀実測図(縮尺1/4)

cmで、径3.6×2.2cmの片丸造りの鐙留め金具が接している。

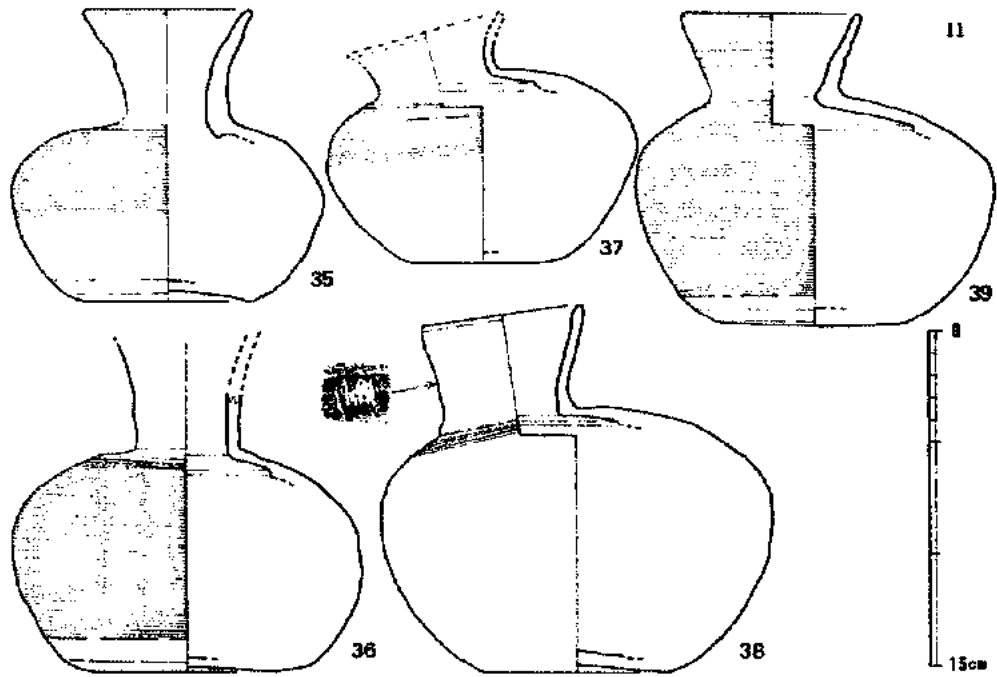
d. 第18号墳出土遺物

出土状況

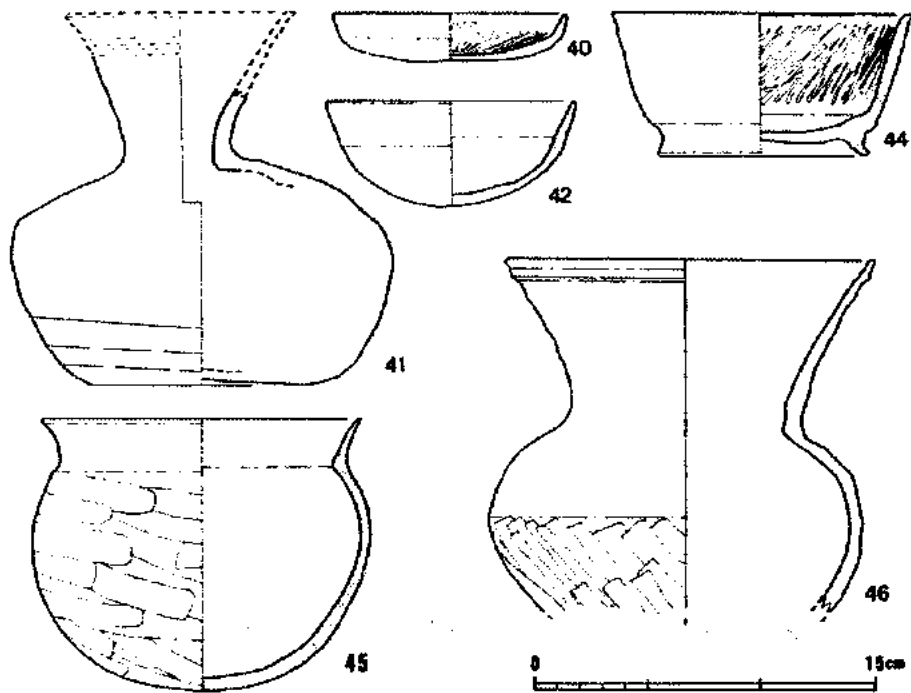
玄室床面から土師器椀(第12図45、図版17)と耳環2個が出土



第10図
第18号墳出土耳環実測図
(縮尺1/2)



第11图 第17号出土須恵器実測图② (縮尺1/3)



第12图 第18~20号出土須恵器・土師器実測图 (縮尺1/3)

した。

耳環 (第10図、図版13)

金銅製品である。環径は共に等しいが、断面形状は1が丸く4.5×5.5mmであるのに対し、2は偏球状で5.0×7.3mmあり太い。

e. 第19号墳出土遺物

出土状況

前室床面から須恵器半瓶 (第2図41、図版17) が、玄室床面からは土師器3個体 (第12図42~44、図版17) と圭頭大刀が出土した。

圭頭大刀 (第13図、図版13)

鋒と茎を欠失する。残存長60.2cmである。刃部は平棟。鞘は銅製の筒金と鞘口があり各々の端部を断面円形の黄金で面している。鞘口には径5.2×4.0cm、厚さ3mmの倒卵形銅製鐔が接している。鐔は把との接触を良くするため、巾3mmの凸出部を造り出している。

柄頭は金銅製圭頭で、懸通孔には玉縁を付している。長さ6.5cm、最大巾4.7cmである。

f. 第20号墳出土遺物

出土状況

西側の周溝中から須恵器1点 (第11図46) が出土したのみであり、石室内からの出土品はない。

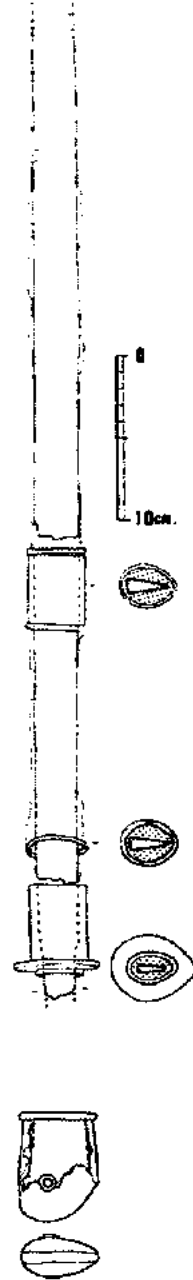
3) 小 結

石室

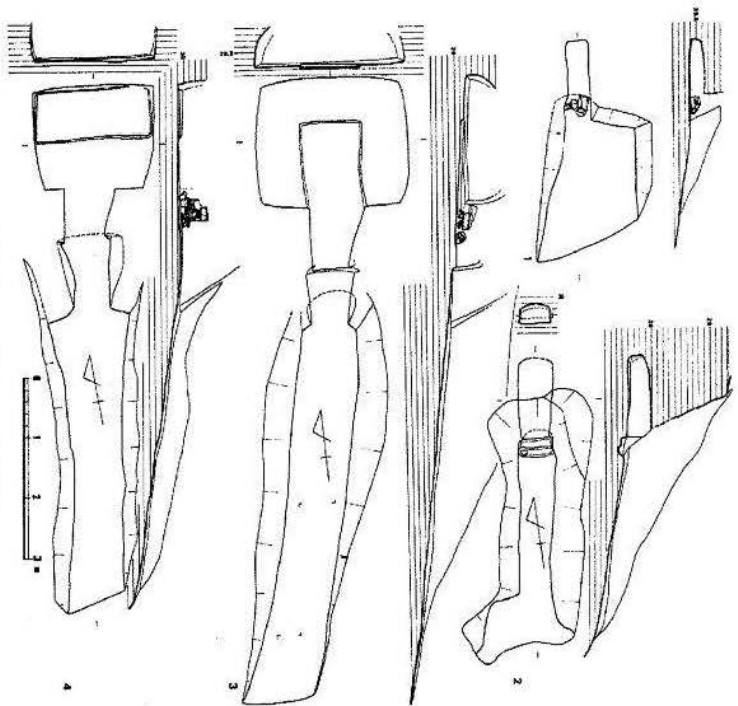
7基の古墳の主体部は全て横穴式石室であるが、大中小3種あり、15・17・19号が大型、18・20号が中型、14・16号が小型である。用材もそれぞれの大きさに従って異なる。閉塞石も大型の石室では基礎にしっかりした石材を据えている。周溝の切り合いから中型の18号が大型の17号より後出であることが知られる。

遺物

須恵器は全て同一形式の範疇に含まれ、7世紀前半代の所産と思われる。出土した3本の大刀は全て細味である。19号出土品は圭頭柄頭を持っていた。刀の全長は把間と鋒を欠失しているため明らかではないが、竹並G-121-1号横穴出土品の82.2cmに近い数値ではないかと思われる。



第13図 第19号墳出土大刀実測図 (縮尺1/4) ▶



第14图 第1~4号楼层平面图(单位:米)

3. 横 穴 群 (図版4~12)

1) 遺 構

17基の墓道よりなる19基の横穴が検出された。個々の横穴についての説明は一覧表(第1表)としたので省略し、横穴の構造について(a)玄室平面形態、(b)玄室立面形態、(c)玄室床面、(d)閉塞状態、(e)羨道および墓道、(f)遺物出土状況について概観してみる。

a. 玄室平面形態

玄室の平面形態は方形・長方形・隅丸長方形・鼓胴形と4つに大別される。長方形及び隅丸長方形のものは1・2・5B・9・12・14号の6基で、このうち14号のみは横長である。1・2・9号は小型の玄室を持ち、巾は60cm以下である。方形のものは3・4・7・8A・8B・15・17号の7基であり、若干羽子板状に奥巾が広がるものや、隅丸のものもある。鼓胴形のものも巾着形とも呼ばれ、5A・6・10・11・13・16の6基が含まれる。この中には奥壁もカーブをもつもの(10・16号)があり、これらは玄室と羨道との巾差が少ない。

b. 玄室立面形態

玄室は崩壊した例が多く、天井頂部の完存するものは9・11号の2基のみである。しかし推定される限りでは全てがアーチ型の立面形態をしている。アーチ型立面ではあるが、壁と天井との境に稜を持つ例(6・9・13・15号)がある。当遺跡検出の横穴はいずれも天井が低く、最も高い3号で1.05m前後であり、9号にいたっては20cm前後にしかすぎない。

c. 玄室床面

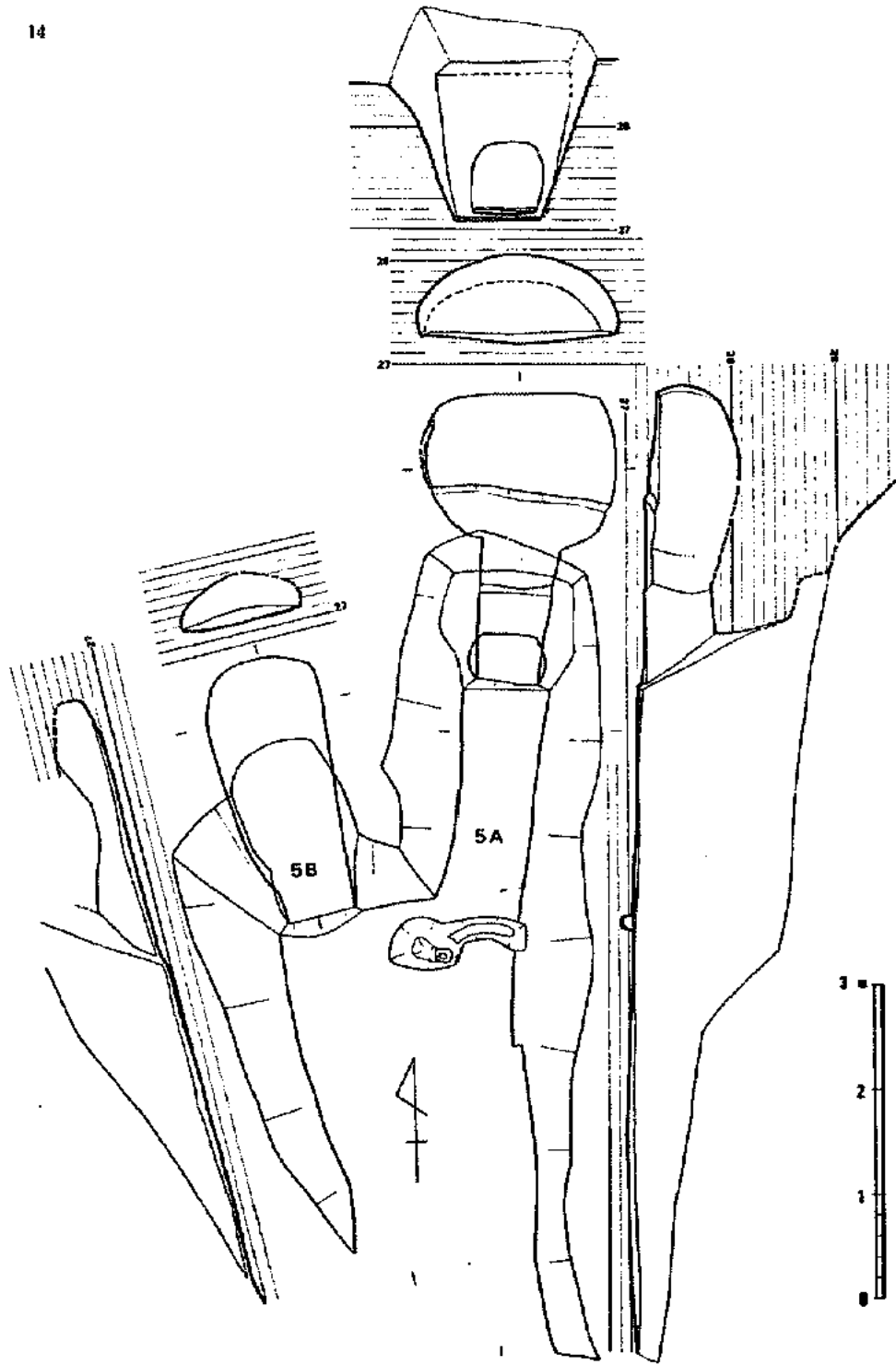
低い屍床を設けた玄室が5例(3・4・5A・8A・8B号)ある。このうち3号と8A・8B号はコ字状の屍床を持つ。コ字状の屍床をもつ例は当然の事ながら、方形プランの玄室である。排水溝は4号の屍床のまわりで認められるのみである。

d. 閉塞状態

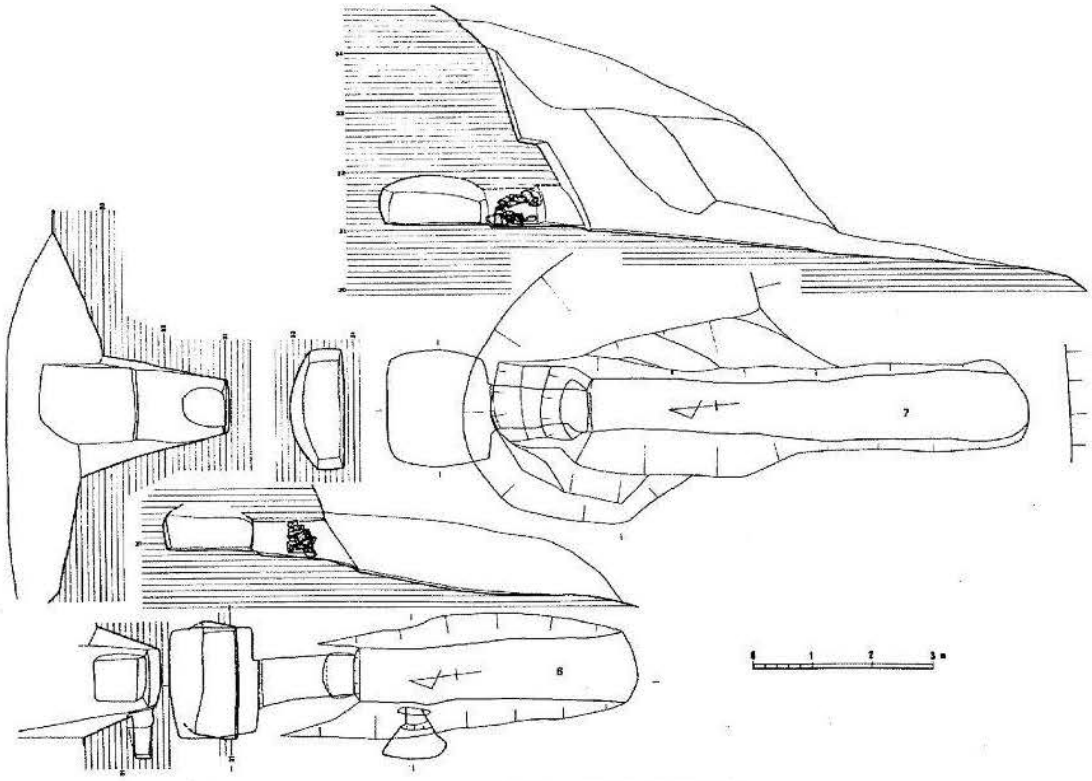
約半数に当たる10基の羨道部間で閉塞石が残っていたが、うち4・7・9・14・17号では完存していた(図版8-2)。これらは特に基部を設けず、角礫を用いて垂直に積み上げている。7号が好例である。

e. 羨道及び墓道

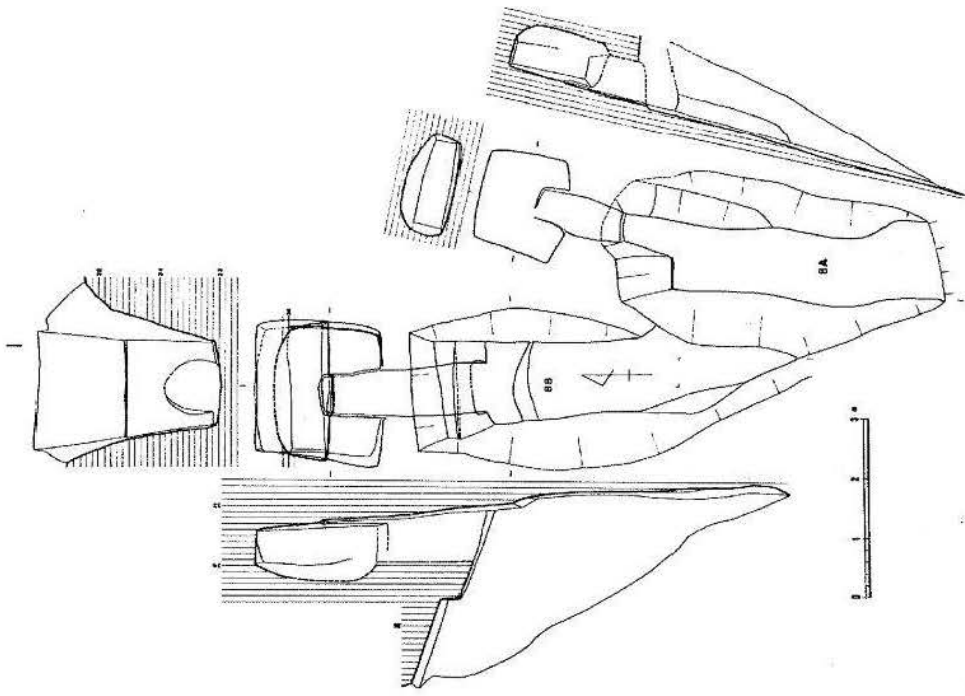
横穴の掘削に当たってはまず丘陵斜面を垂直に近く切り割って墓道及び羨門部を作り出す由であるが、この正面カット面の羨門部上にテラスを作り出した例がある(5・6・8B号)。羨門の天井部はほとんどがアーチ型をなすと思われるが、7号のみは方形である。9号は羨門を二段に造り出しているが、それは9号の羨道が極く短く、閉塞石の崩壊を防ぐのに必要であったからと思われる。9号と同様のプランを持つ2号の場合は玄室との境に溝を持っており、木蓋で閉がれたものであろう。



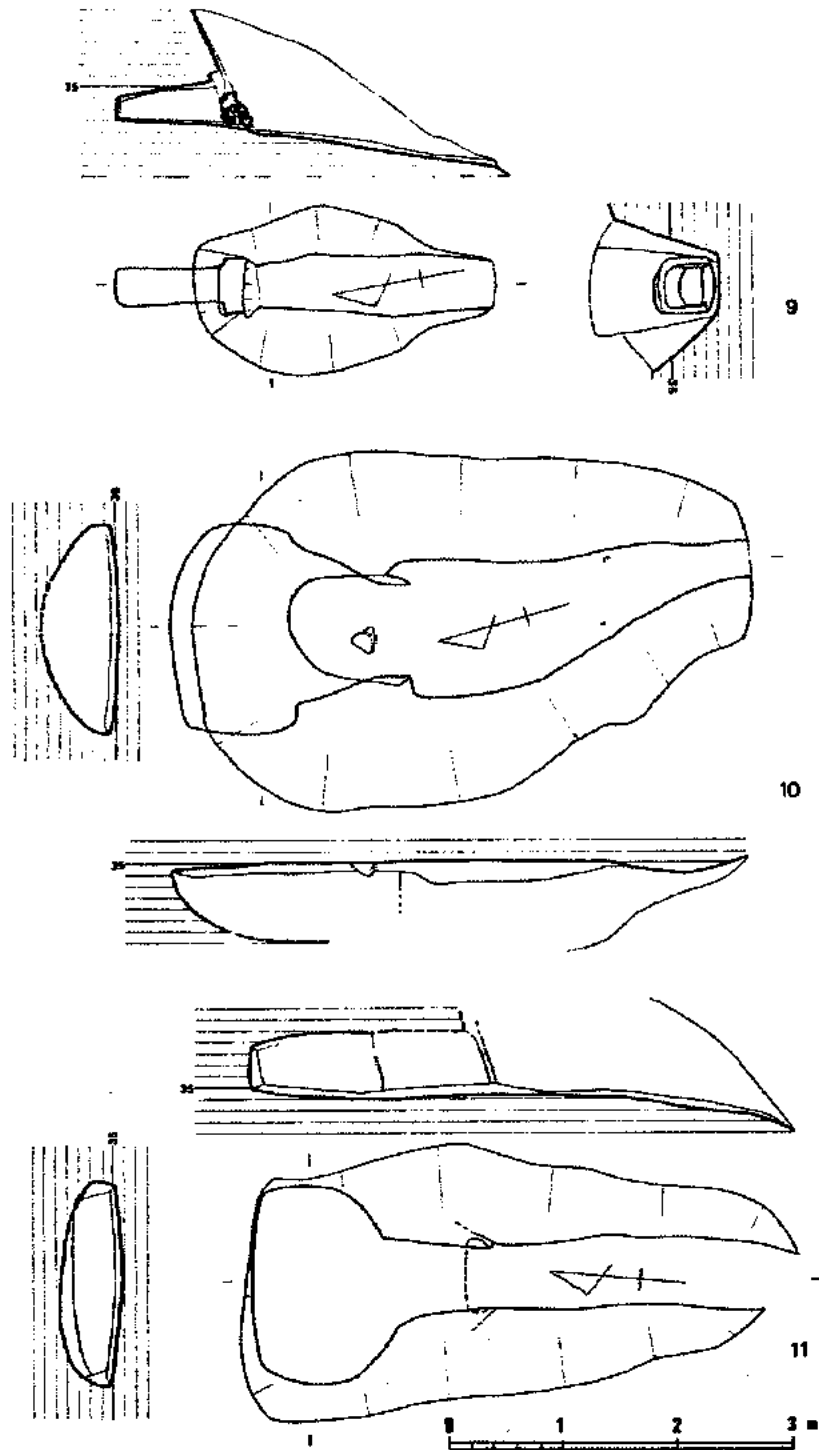
第15图 第 5 号 横 穴 实 测 图 (缩 尺 1 / 60)



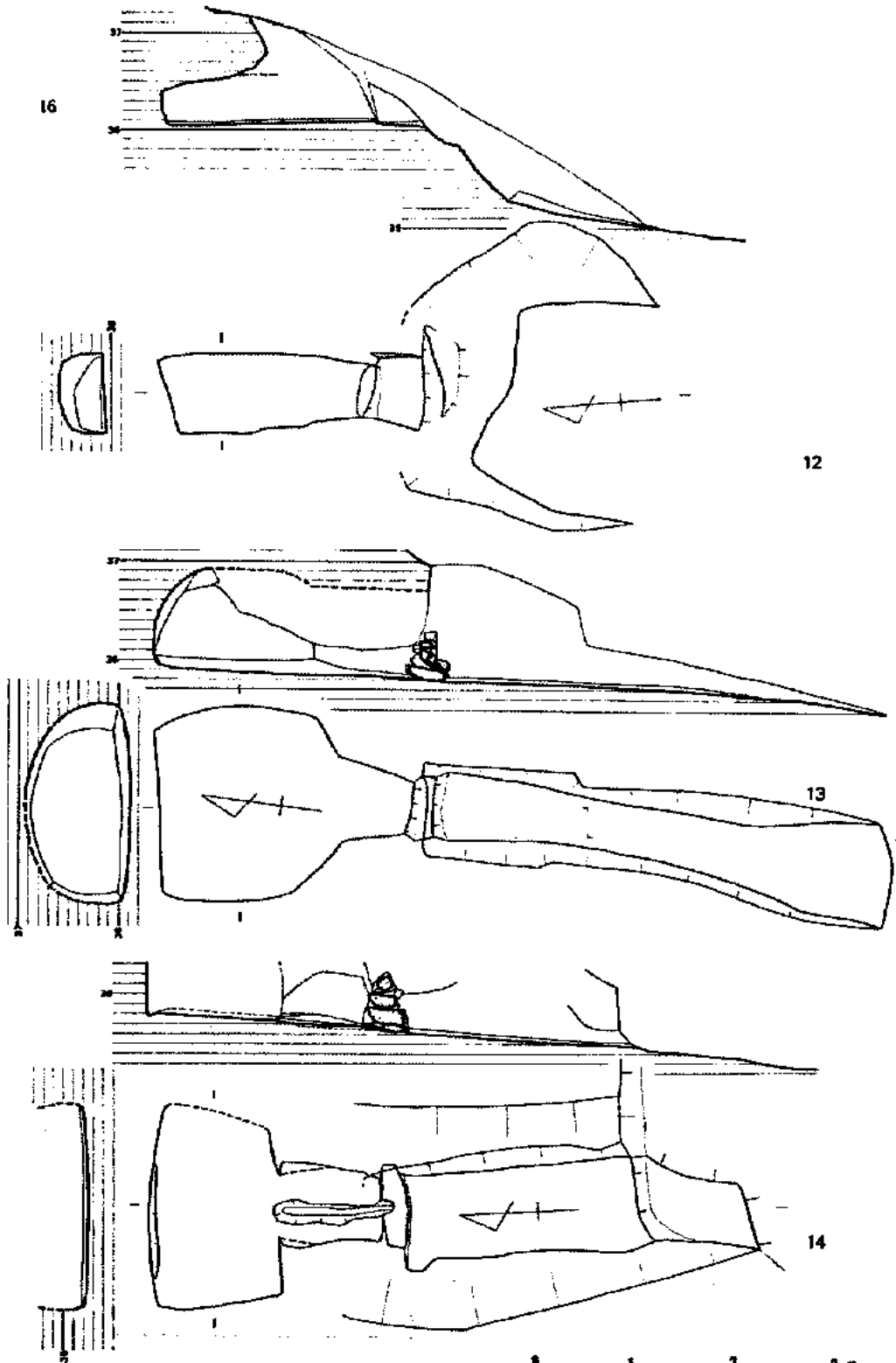
第16图 第6·7号铜剑及其剑鞘(比例1/60)



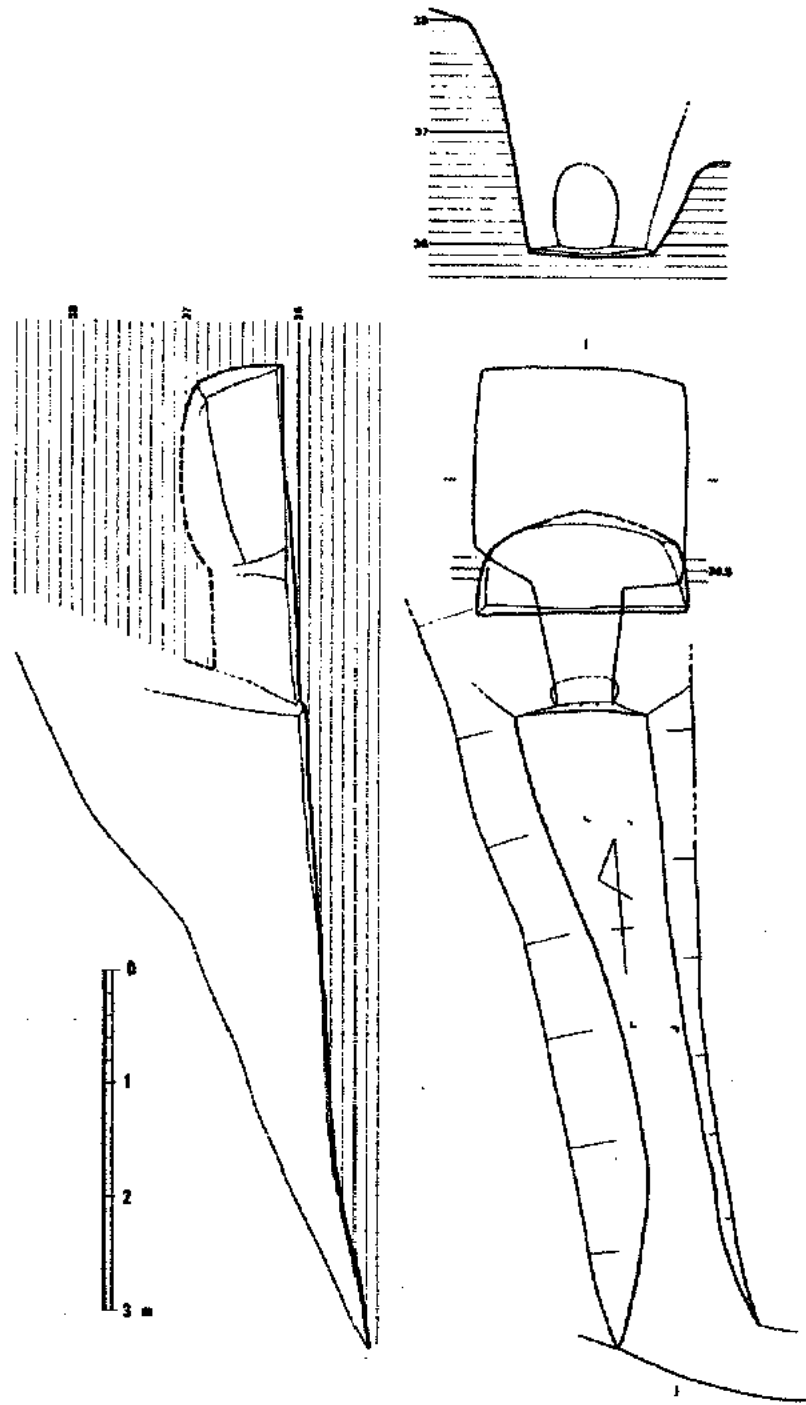
第17圖 第 8 号 横 穴 墓 形 图 (縮尺 1/50)



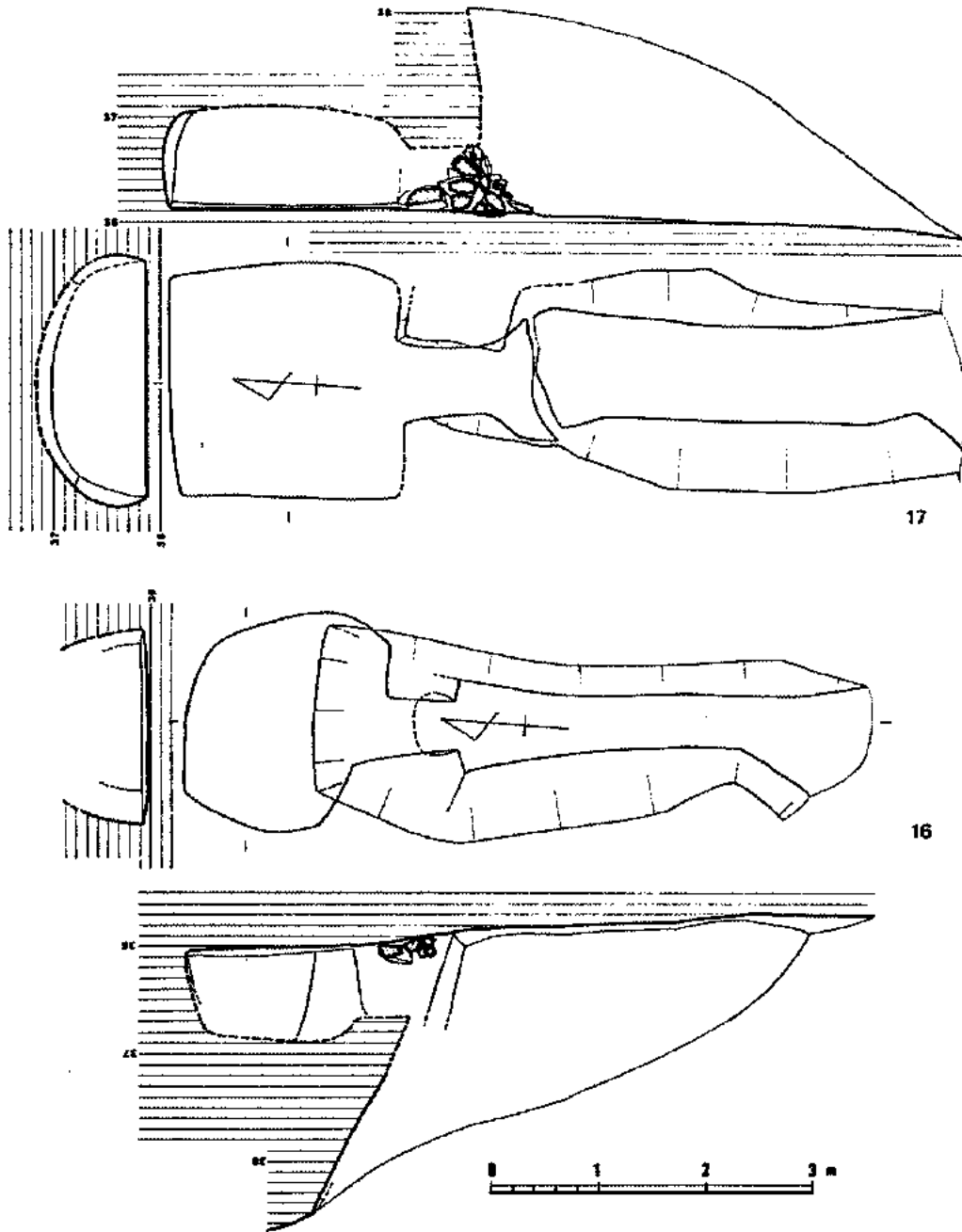
第18图 第9~11号横穴实测图(缩尺1/60)



第19图 第12-14号横穴墓测图(缩尺1/60)



第20回 第15号 横穴 実測図 (縮尺1/60)



第21图 第16·17号横穴实测图(缩尺1/60)

羨道と玄室との間に浅い段を設ける例は6・7号であり、これらは玄室全体を一つの屍床とみなしたものととも考えられる。墓道と羨道との境が有段になる例は多いが、8B号は墓道中間に段部を設けている。

5A号は墓道が伸びてB号と共通する前庭部へと続くが、その境に溝が掘られている。何を意味するものか判然としないが、A号の墓道の閉塞木版を据えるための溝とも考えられる。

f. 遺物出土状況

玄室床面からの出土遺物は少なく次記の通りである。

2号	須恵器平瓶1		
3号	" 高杯1	刀子	鉄鏃
4号			鉄鏃
5号			紡錘車
6号			耳環
15号	須恵器蓋1・台付椀1・平瓶1	鉄鏃	
17号	須恵器杯蓋2・杯身2		

他に3・4・5・7・8・17号の墓道から須恵器・土師器が出土している。特に5号からは17個体の須恵器と1個体の土師器が出土している。

2) 遺物

a. 須恵器 (第22・25~27図, 図版19~22)

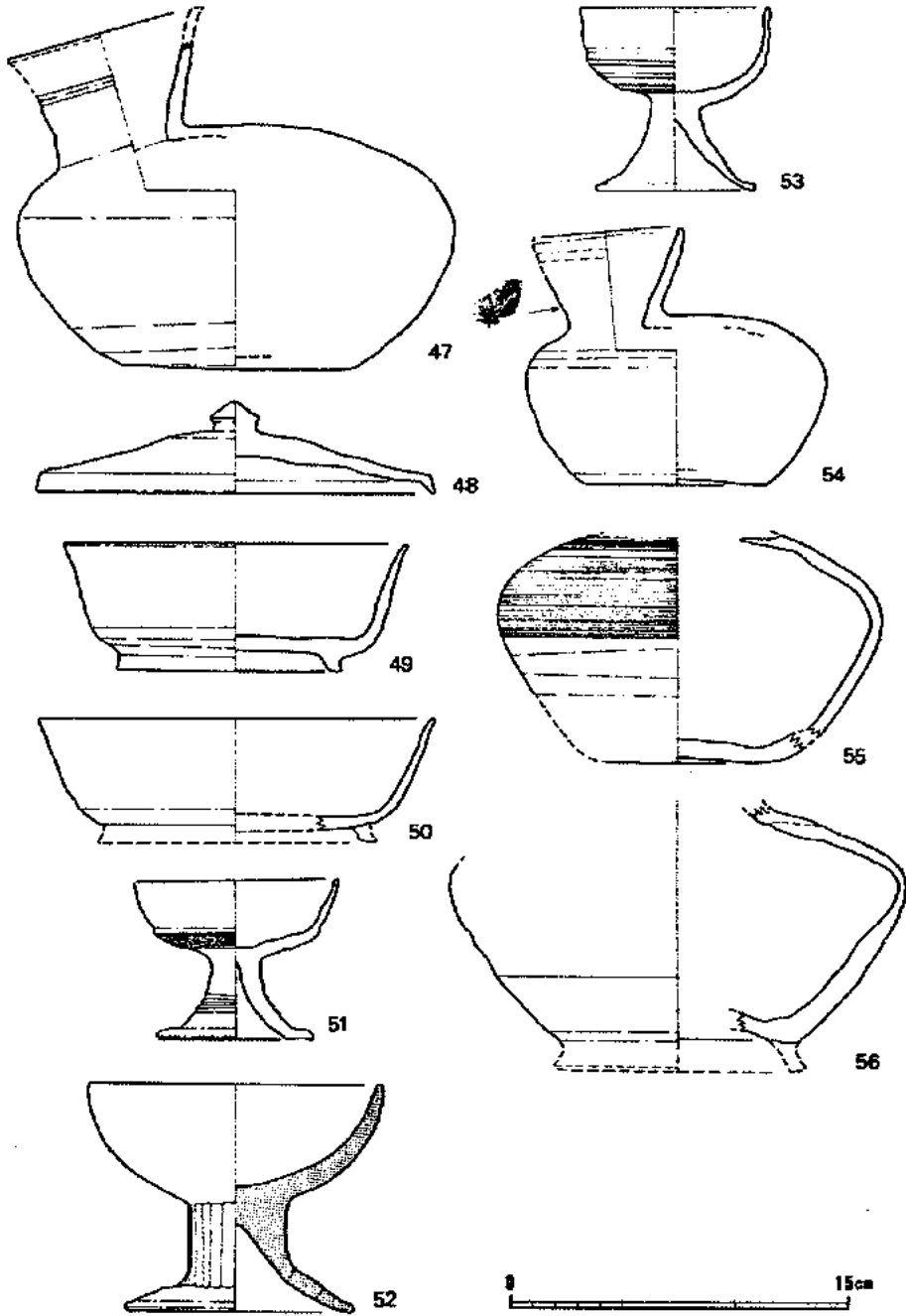
15号・17号の玄室床面出土品と5号の墓道出土品が一括品である。杯蓋はかえりをもつ例を含まず、頂部にボタン状あるいは偏平な宝珠状ツマミを持つ。天井部はへら削りである。杯身は外方へと開く高台を持つものが多く、底部はかなり広くへら削りしており丸味を持つ。高杯は4号から1点、5号から1点出土したのみで少ない。平瓶は多い。胴部下半から底部にかけて粗いへら削りを施し、底面はさらに指でナデ調整が押えている。肩部は丸味を持つ例がほとんどであるが、15号の床面からは明瞭な稜をもつ例(第26図-80, 図版21)が出土している。他例の口縁部は丸くおさめているのに対し、80は有段である。長頸壺は多くが高台が付き、肩は丸味をもっている。17号の墓道から出土した壺(第26図-86, 図版22)は丸味のある長胴を持ち、やや上げ底である。器面は極めて平滑である。外面平行叩きの上から木目細かにヨコナデされ、胴部下半はへら削りである。胎土は精良であるが、焼成は特に胴部下半から底部が軟弱である。他には67・68の小壺、79の有蓋台付椀が目ざされる。

b. 土師器 (52・73・87)

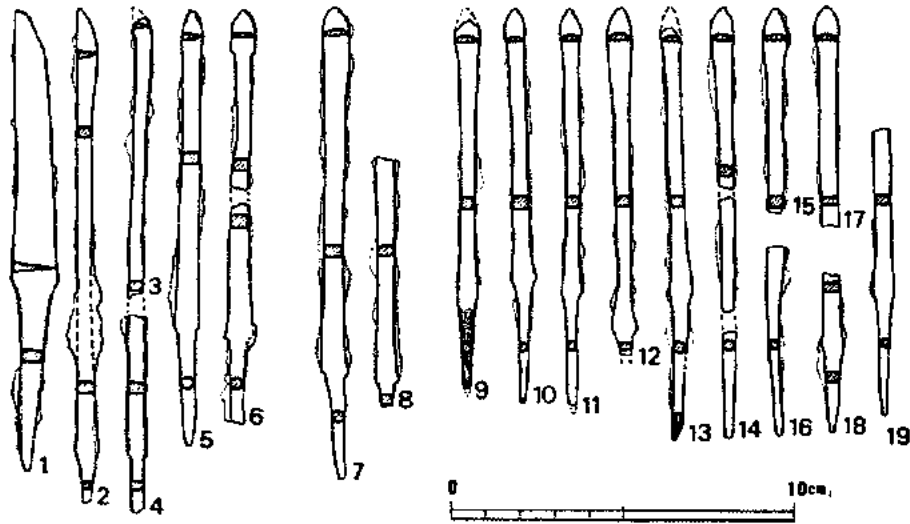
僅かに高杯と皿の計3点のみである。

c. 鉄器 (第23図, 図版18)

刀子と鏃である。3号出土の刀子は全長139mm、刃部長80mm、闊部巾14mmである。刃部は平



第22図 第2～4号横穴出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/3）



第23図 第3・4・15号横穴出土鉄器実測図（縮尺1/2）
（1～6は3号、7・8は4号、9～19は15号）

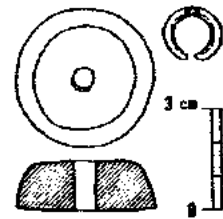
棟両側である。出土した鉄は全て尖根式である。3号からは片刃斧箭式が出土しているが、他は全て片丸造り鑿箭式鉄である。莖部と刃部の境が不明瞭なものがほとんどである。全長を知り得る例は多く、2は残存長14.5cmで出土例中最も長い。7は13.9cm、10は11.7cmで最も短い。

d. 紡錘車（第24図、図版18-2）

5号から出土した滑石製品である。底径40mm、頂部径30mm、厚さ15mmである。重量は48.3g。

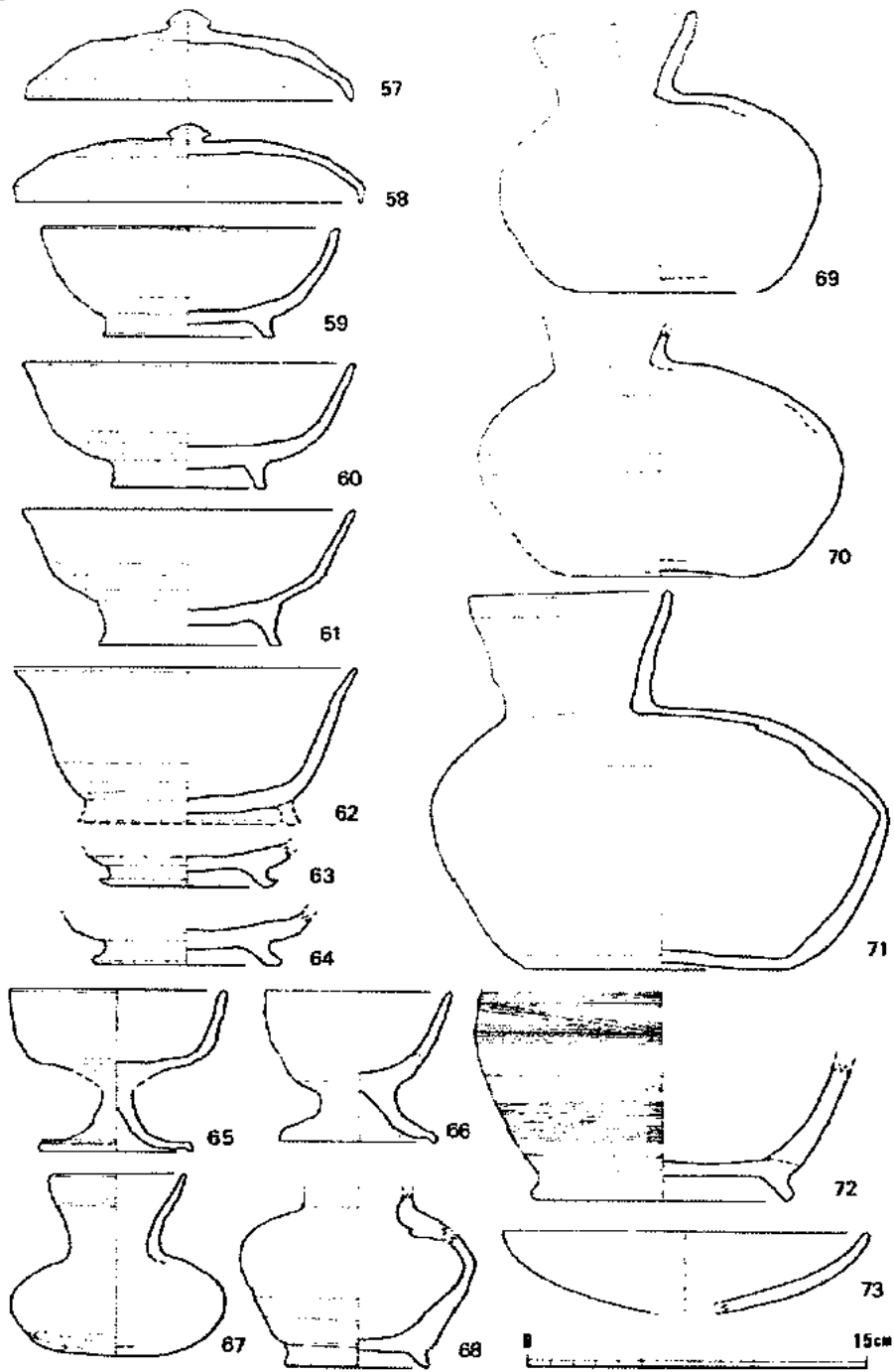
e. 耳環（第24図、図版18-2）

6号から出土した銅製品である。表面腐蝕して細味になっている。

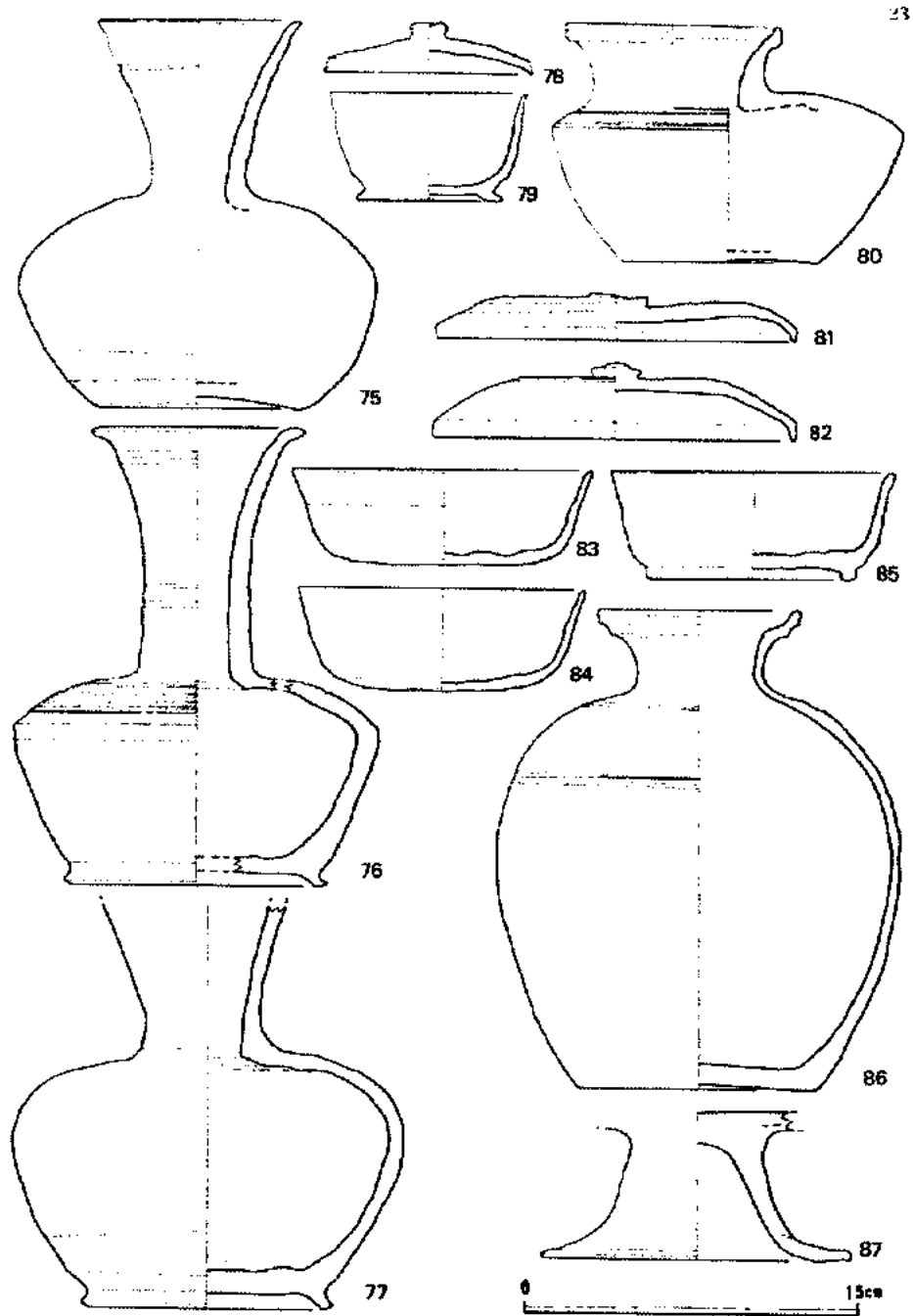


第24図

第5号横穴出土紡錘車
及び第6号横穴出土
耳環実測図
（縮尺1/2）



第25図 第5号横穴出土須惠器・土師器実測図（縮尺1/3）



第26图 第7·8·15·17号横穴出土须惠器実測図（縮尺1/3）

第2表 古墳出土須恵器観察表

番号	器種	出土地	法量 (cm)	調整法及び特徴
1	杯蓋	15号墳 墓道	[18.8]21.9[10.1]0.4	無 天井部静止へラ削り
2	杯身	15号墳 墓道	[19.6]24.4	無 底部へラ削り、体部中央にヒキノ沈線をもつ。
3	高杯	15号墳 墓道	[18.5]29.4[5]7.2	無 杯部下から頸部にかけてカキノ調整。
4	高杯	15号墳 墓道	[19.4]27.8[5]7.1	無 頸部中央に回転によるラ線状沈線がある。
5	埴	15号墳 瓦丘中	[19.8]25.9	無 口縁部は細く直立する。底部へラ削り。
6	埴	15号墳 前室床面	[13.9]29.8[8]8.9	有 胴部へラ削り、全体にふみ入りに、焼成不良。
7	埴	15号墳 墓道	[11.1]21.1[5]7.3	無 体球部に部分的カキノ調整。
8	埴	16号墳 石室床面	[17.4]21.6[10]10.5	有 胴部から底部にかけて下持ちへラ削り。
9	埴	16号墳 瓦丘中	[14.2]	無 体部カキノ調整、底部は指圧え。
10	平埴	16号墳 瓦丘中	[16.8]24.5[14]7	無 体部カキノ調整、底部は粗いへラ削り。
11	埴	15号墳 墓道	[17.8]24.7.8	有 胴部平行明きの上カキノ調整。
12	埴	15号墳 埴丘	[17.6]29.8	無 胴部平行明きの上カキノ調整。
13	埴	16号墳 埴丘	[15.0]24.6	有 胴部平行明き、焼成で自然陥落している。
14	杯蓋	17号墳 墓道	[17.2]21.6[8]6.3[10]5	無 天井部へラ削り。
15	杯蓋	17号墳 墓道	[17.6]21.9[8]9.7[10]6	有 焼成軟弱で、器面割落。
16	杯蓋	17号墳 墓道	[17.4]21.8[8]8.4[10]4	有 15に類似、天井部ナテ調整。
17	杯蓋	17号墳 墓道	[18.4]21.9[10]3[10]1	無 天井部へラ削り、全体に薄手。
18	蓋	17号墳 前室床面	[12.8]22.8	無 天井部へラ削り。
19	蓋	17号墳 墓道	[15.4]22.5[8]8.4[10]5	無 天井部へラ削り。
20	杯身	17号墳 墓道	[18.9]22.7	無 底部へラ削り。
21	杯身	17号墳 墓道	[19.4]23.7	無 底部へラ削り。
22	杯身	17号墳 墓道	[19.3]23.6	無 底部へラ削り。
23	杯身	17号墳 墓道	[19.4]23.3	無 底部静止へラ削り。口縁部は短かく外反する。
24	高杯	17号墳 墓道	[19.7]28.7[5]7.1	無 杯底部はへラ削りの上カキノ調整。頸柱部もカキノ調整。
25	高杯	17号墳 石室埋土中		無 焼成軟弱で調整法不明。偏平な頸柱部をもつ。
26	高杯	17号墳 墓道	[17.2]27.1[5]7.0	有 杯底部はカキノ調整し、一部上からナテしている。
27	高杯	17号墳 墓道	[18.4]27.6[5]6.6	無 杯底部へラ削り。口縁部は外反する。
28	高杯	17号墳 前室床面	[18.9]28.2[5]6.7	無 杯部は口縁をヨコナテ調整し、地は全てカキノ調整。
29	高杯	17号墳 墓道	[19.3]	無 杯底部と頸柱中央部はカキノ調整。
30	平付埴	17号墳 前室床面	[17.6]25.3	無 口縁部は胴部から直線的に外傾する。底部へラ削り。
31	埴	17号墳 前室床面	[15.8]24.3[5]8.6	無 偏平な胴部をもつ。底部
32	小形埴	17号墳 前室床面	[14.0]27.2[10]10.5	無 胴部下から底部にかけて静止へラ削り。
33	脚付埴	17号墳 墓道	[11.0]28.0	無 体球部下半に部分的カキノ調整。

番号	器種	検出番号 図版番号	出土地点	法量 cm	へら 起り	調整法及び特徴
34	脚付壺	第114 図版16	17号墳 桑道	⑤8.6⑥8.7	無	体球部はカキメ調整。脚部に2段の円形凹しをもつ。
35	壺	第114 図版16	17号墳 前室床面	①7.3②13.0③13.7	無	胴部上半部カキメ調整。底部へら削り。
36	壺	第114 図版16	17号墳 前室床面	⑤15.3	無	胴部全面カキメ調整。底部へら削りの上ナテ調整。
37	平瓶	第114 図版17	17号墳	①7.9②11.2③13.7	無	胴部カキメ調整。底部ナテ調整。
38	平瓶	第114 図版17	17号墳 前室床面	①6.9②16.3③17.3	有	胴部付帯にカキメ調整。器面のヨコナテは直。焼成軟弱。
39	平瓶	第114 図版17	17号墳 前室床面	①7.7②14.0③15.8	無	体部全面カキメ調整。底部停止へら削り。
41	平瓶	第124 図版17	19号墳 前室床面	⑥16.7	無	胴部叩きの上ヨコナテ。底部へら削り。
46	広口壺	第124 図版17	20号墳 周溝中	①16.1②16.3	無	胴下半部手持ちへら削り。

第3表 古墳出土土師器観覧表

(1) 114号墳出土土師器
(2) 114号墳出土土師器

番号	器種	検出番号 図版番号	出土地点	法量 cm	調整法及び特徴
42	鉢	第124 図版17	19号墳 石室床面	①13.8②11.9③14.7	胴部は粗いへら削り。
43	皿	第124 図版17	19号墳 玄室床面	①10.2②2.1	内面に放射状暗文がある。外面は器装剥落。
44	高台杯	第124 図版17	19号墳 玄室床面	①13.2②6.2	外面へら磨き。内面に雑な斜行暗文がある。
45	碗	第124 図版17	18号墳 玄室床面	①10.9②4.6	器外壁は剥落しているが、へら磨きかと思われる。焼成不良。

第4表 横穴出土須恵器観覧表

(1) 25号墳出土須恵器
(2) 25号墳出土須恵器

番号	器種	検出番号 図版番号	出土地点	法量 cm	へら 起り	調整法及び特徴
47	平瓶	第224 図版19	2号横穴 床面	①8.9②16.3③19.2	無	胴部下位から底部にかけてへら削り。焼成軟弱。
48	杯蓋	第224 図版19	3号横穴 墓道	①17.5②4.1	無	玉珠状ツマミを持つ。焼成軟弱で調整法不明。
49	杯身	第224 図版19	3号横穴 墓道	①15.0②5.6	無	底部へら削り。
50	杯身	第224 図版19	3号横穴 墓道	①17.2②5.5(推定)	無	高台部を欠失。焼成軟弱で調整法不明。
51	高杯	第224 図版19	3号横穴 玄室床面	①8.9②7.1③6.9	無	杯底部カキメ調整。脚柱部にフ椀状の2-3本の沈線をもつ。
53	高杯	第224 図版19	4号横穴 前庭部	①8.3②8.2③7.1	無	杯底部は部分的カキメ調整。
54	平瓶	第224 図版19	4号横穴 墓道	①6.5②11.5③13.3	有	胴部と底部へら削り。
55	壺	第224 図版19	4号横穴 墓道	⑥17.1	無	胴部へら削り。胴下半から底部にかけて広くへら削り。
56	平瓶	第224 図版19	4号横穴 墓道	⑥20.1	無	底部へら削り。高台欠失。硬質で外面に黒色自然釉付着。
57	杯蓋	第254 図版19	5号横穴 墓道	①14.3②4.1	無	扁平な玉珠状ツマミをもつ。天井部へら削り。
58	杯蓋	第254 図版19	5号横穴 墓道	①15.3②3.5	無	扁平な玉珠状ツマミをもつ。天井部へら削り。
59	杯身	第254 図版19	5号横穴 墓道	①13.1②4.9	無	底部へら削り。
60	杯身	第254 図版20	5号横穴 墓道	①14.5②5.6	無	底部へら削り。
61	杯身	第254 図版20	5号横穴 墓道	①14.5②6.1	無	高い高台をもつ。体部下半から底部にかけてへら削り。
62	杯身	第254 図版20	5号横穴 墓道	①15.1	無	杯部は深い。底部へら削り。高台は欠失。

番号	器種	神代番号 図版番号	出土地点	法量 cm	へら 起身	調整法及び特徴
63	杯身	第25図 図版20	5号横穴 墓道		無	高台端部ははね上る。底部へら削り。
64	杯身	第25図	5号横穴 墓道		無	高台は強く横へ張る。底部へら削り。
65	高杯	第25図 図版20	5号横穴 墓道	①9.5②7.2③6.9	無	杯底部へら削り。軟質で外面に自然物 付着。
66	胴付瓶	第25図 図版20	5号横穴 墓道	①8.2②6.6③6.9	無	全体に雑な作り。焼成軟弱。
67	小形壺	第25図 図版20	5号横穴 墓道	①5.8②8.0③9.4	無	扁平な胴部をもつ。底部静止へら削り。
68	小形壺	第25図 図版20	5号横穴 墓道	⑥10.4	無	全体に雑な作り。胴部下半から底部へ ら削り。口縁部欠失。
69	平瓶	第25図 図版20	5号横穴 墓道	①7.1②12.7③14.6	無	底部へら削り。
70	平瓶	第25図 図版21	5号横穴 墓道	⑤16.1	無	胴部下半から底部にかけて広く静止へ ら削り。底部はナデ調整。
71	平瓶	第25図 図版21	5号横穴 墓道	①8.8②16.8③20.1	有	底部へら削りの上指圧え。
72	平瓶	第25図	5号横穴 墓道		無	胴部カキノ調整。高台は強く外方へ張る。
74	甕	第27図 図版21	5号横穴	①16.3②32.3	無	胴部平行叩きの上ヨコナデ。
75	長頸壺	第26図 図版21	7号横穴 墓道	①9.0②17.7③16.0	無	胴下部へら削り。底部ナデ調整。
76	長頸壺	第26図	8号横穴 墓道	①9.5②20.6③16.1	無	肩が張り、短かい高台をもつ。胴部カ キノ調整。胴下半ヨコナデ調整。
77	長頸壺	第26図 図版21	8号横穴 墓道	⑤17.4	無	口縁部を欠失する。胴部下半へら削り。
78	壺	第26図 図版21	15号横穴 玄室床面	①9.3②2.3	無	外面ヨコナデ調整。79とセットになる。
79	台付瓶	第26図 図版21	15号横穴 玄室床面	①8.7②4.9	無	外面ヨコナデ調整。
80	平瓶	第26図 図版21	15号横穴 玄室床面	①9.5②10.8③15.7	無	肩が鋭く張り、扁平で広い胴部をもつ。 胴部カキノ調整。
81	杯蓋	第26図 図版22	17号横穴 玄室	①16.0②2.1	無	天井部へら削り。
82	杯蓋	第26図 図版22	17号横穴 玄室	①16.0②3.5	無	天井部へら削り。
83	杯身	第26図 図版22	17号横穴 玄室	①13.2②4.3	無	底部へら削り。
84	杯身	第26図 図版22	17号横穴 玄室	①12.6②4.7	無	底部へら削り。
85	杯身	第26図 図版22	17号横穴 閉塞石間	①12.6②4.9	無	高台は端部磨耗。焼成軟弱。
86	壺	第26図 図版22	17号横穴 墓道	①8.8②21.5③18.0	無	胴部は平行叩きの上から平滑なヨコナ デ調整。胴部下半へら削り。
88	甕	第27図 図版22	13号横穴	①22.3	無	肩部をへら削りしている。

第5表 横穴出土土器器種表 (①0.2②0.3③0.4④0.5⑤0.6⑥0.7⑦0.8⑧0.9⑨1.0⑩1.1⑪1.2⑫1.3⑬1.4⑭1.5⑮1.6⑯1.7⑰1.8⑱1.9⑲2.0⑳2.1㉑2.2㉒2.3㉓2.4㉔2.5㉕2.6㉖2.7㉗2.8㉘2.9㉙3.0㉚3.1㉛3.2㉜3.3㉝3.4㉞3.5㉟3.6㊱3.7㊲3.8㊳3.9㊴4.0㊵4.1㊶4.2㊷4.3㊸4.4㊹4.5㊺4.6㊻4.7㊼4.8㊽4.9㊾5.0)

番号	器種	神代番号 図版番号	出土地点	法量 cm	調整法及び特徴
52	高杯	第22図 図版19	3号横穴 玄室床面	①12.7②10.0③10.0	杯部内外面へら磨き。脚柱部へら削り。
73	甕	第26図	5号横穴 墓道	①15.8②3.7	軟質で器壁割落。外面はへら磨きか。
87	高杯	第26図 図版22	17号横穴 墓道	⑤13.8	外面ヨコナデ調整。

III ま と め

久戸古墳群の全域を調査し終え、4世紀末から7世紀後半にかけておよそ300年間にわたる墓制の変遷をたどることができた。

南丘陵は標高54.45mを最高所とし、南北両面は急斜面をなす狭い馬背状鞍部を持っている。そこからの展望は釣川中流域の沃野を余すところなく看取することができる。この尾根に第1次調査した古墳群が占地しているのである。それに対し北丘陵は西端の尾根上で標高40mを持つにすぎない緩やかな丘陵である。今回調査したその南斜面からは谷筋と南丘陵の雄姿を見るにすぎない。その歴然たる占地性の相違については驚くばかりであるが、その意味するところは何であろうか。南丘陵では三角板葺短甲や銀象嵌三葉環頭が副葬されている。須恵器にも子持懸や鳥首懸があり、4世紀末から5世紀代の特殊遺物が出土している。北丘陵の第19号墳では圭頭柄頭を持つ大刀が出土している。各々の時代のもつ多加工製品が負う歴史性については物質的貴重性のみでは計り得ないが、少なくとも5世紀から7世紀にかけて久戸古墳群の被葬者が貧困化したなどは当然考えられない。まして社会階層について霊界の占地のみに関して言及してはならない。南丘陵から北丘陵に被葬地が移動するについてはそれなりの政治的・社会的・経済的見地からの検討が必要であろう。

南丘陵造墓末期と北丘陵造墓初頭との間には私見ではあるが70～80年の間隙がある。およそ2世代である。この間6世紀後半から7世紀初頭頃の墓域は調査区内にはなく、他地に求めなければならない。

宗像の玄海灘に近い津屋崎町や玄海町・遠賀川西岸の岡垣町や遠賀町さらに宗像郡内でも他地ではこの時期の群集墳が盛んであり、それなりの独立群をなしている。

久戸古墳群の変遷する墓制のうち、横穴については第1次調査でも古墳の内部主体として3基検出しており、今回の19基と考え合をせて興味深い。つまり墳丘を持った横穴は今回調査分の横穴群は構造的に大きな差がみられる。つまり墓道は玄室に向かって下向し、玄室の床面はさらに低くなる点、羨道が狭く、羨門は方形に開口する点、天井が高く家形になると思われる点、閉塞石が羨門手前に置かれ板石を用いた例もある点等々であり、より古式の様相をもっている。この点竹並遺跡でも同様である。時代は6世紀中葉と想定され、今回調査分の横穴とは100年以上の隔りがある。この間横穴に被葬するという慣習は当遺跡では社絶したのである。

横穴式石室は7世紀前半の所産であり、その後横穴に被葬するようになるという変化もその理由は知れないが、興味深い変化である。

版 圖



(1) 第2次調査区全景 (左丘陵は第1次調査区)



(2) 古墳群全景



(1) 第14号填石室



(2) 第15号填石室

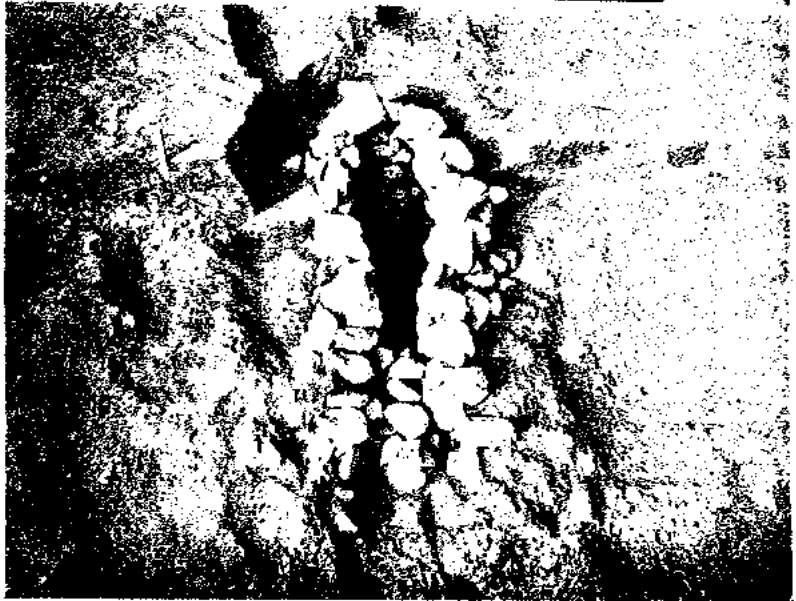
(1) 第17号填石室



(2) 第17号填遺物出土狀況



(3) 第18号填石室



図版 4



(1) 横穴群全景 (東より)



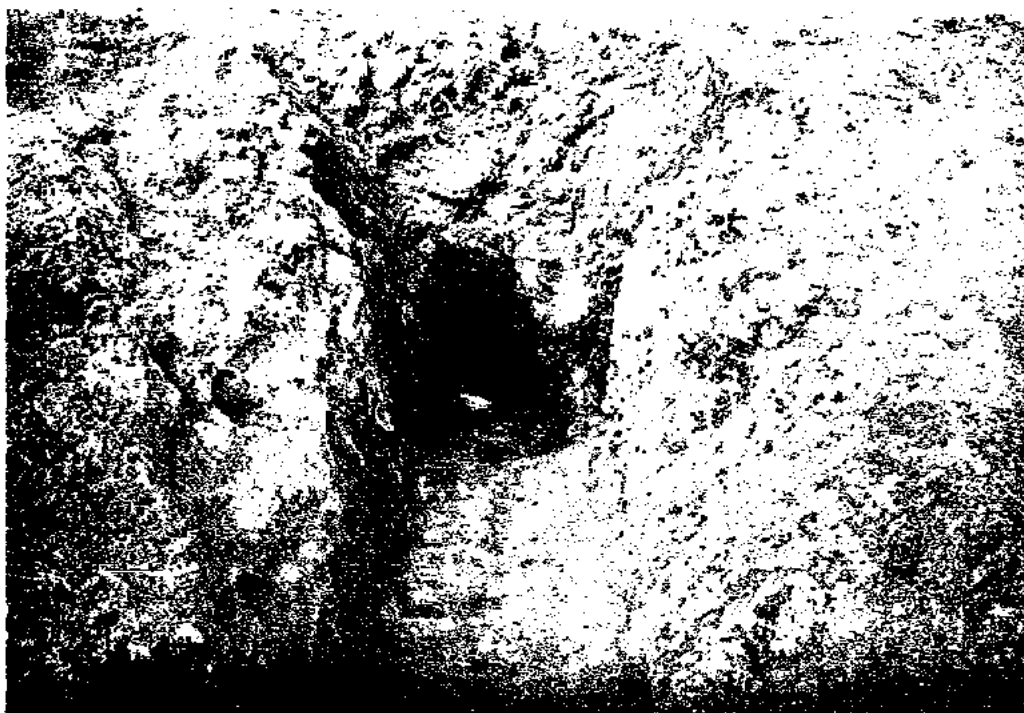
(2) 同 上



(1) 第1 - 7号横穴と第19 - 20号墳



(2) 第12 - 16号横穴



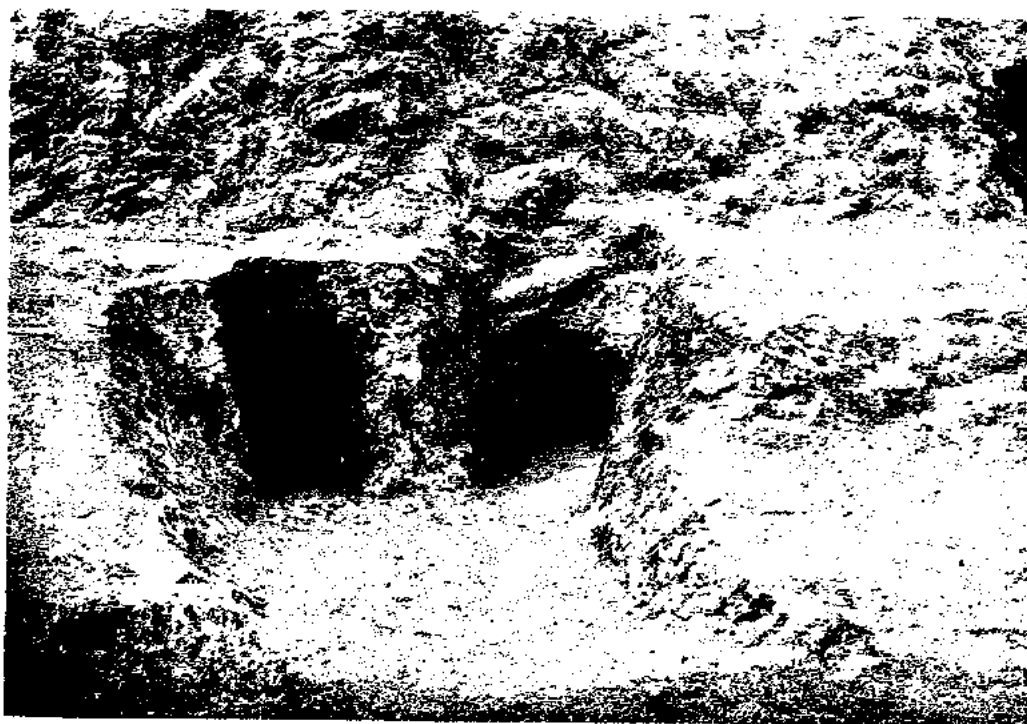
(1) 第2号横穴



(2) 第3~5A·B号横穴



(1) 第4号横穴



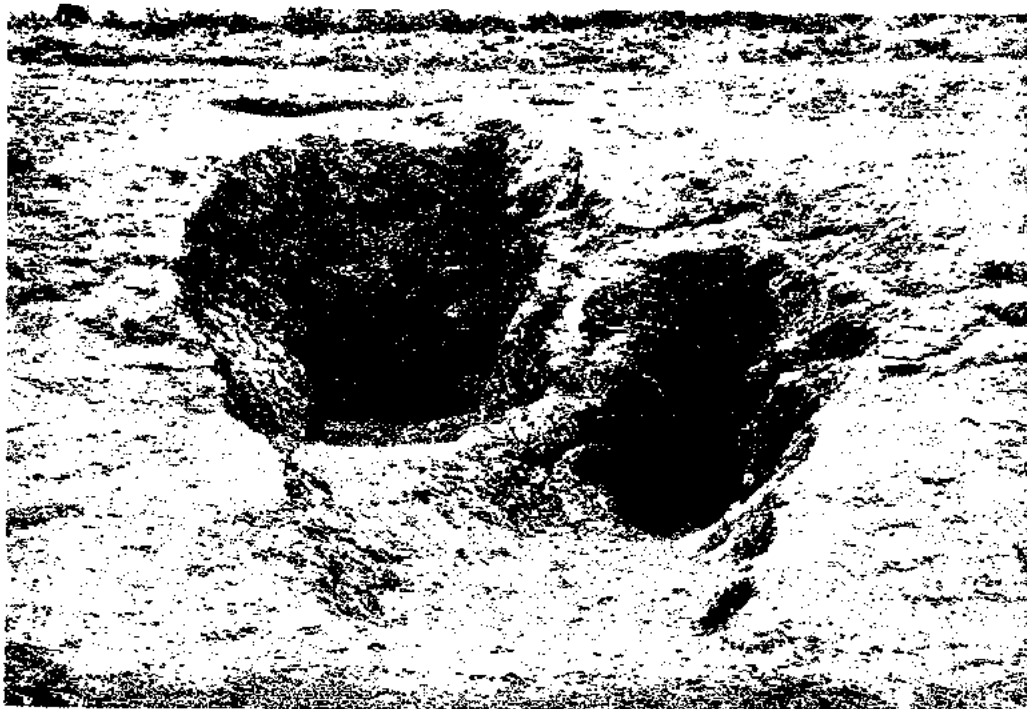
(2) 第5A·B号横穴



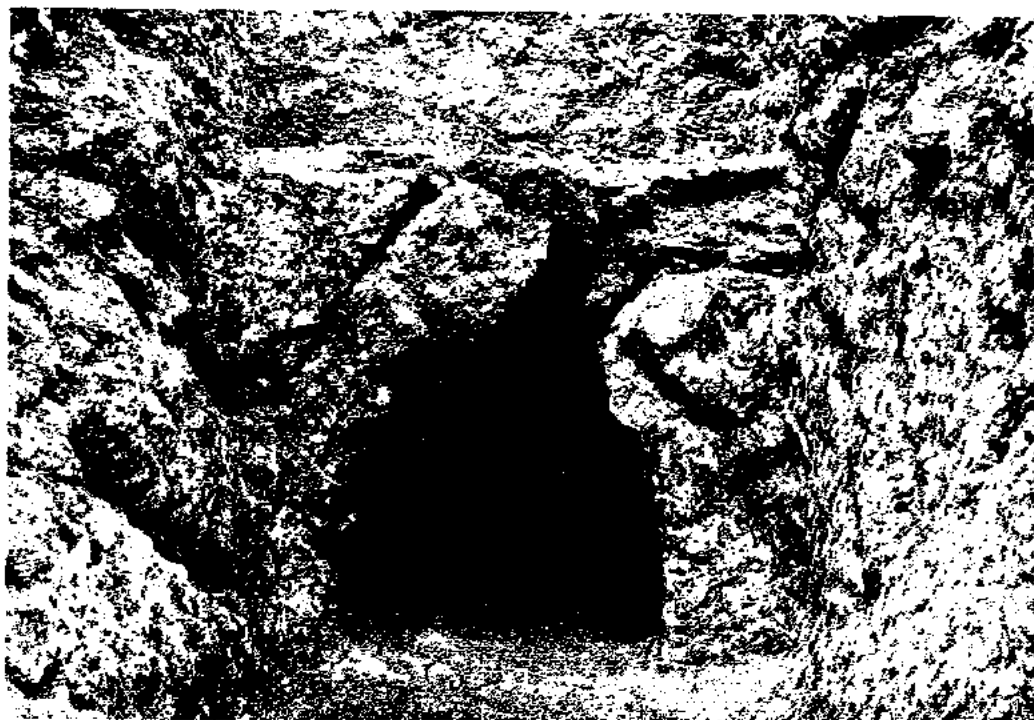
(1) 第6·7号横穴



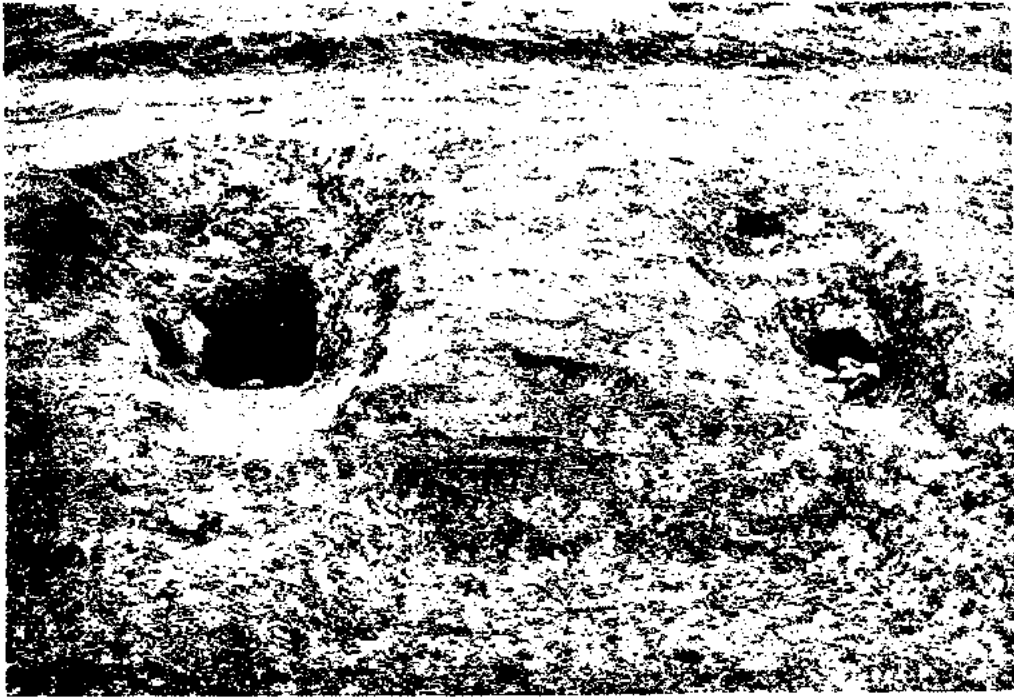
(2) 第7号横穴



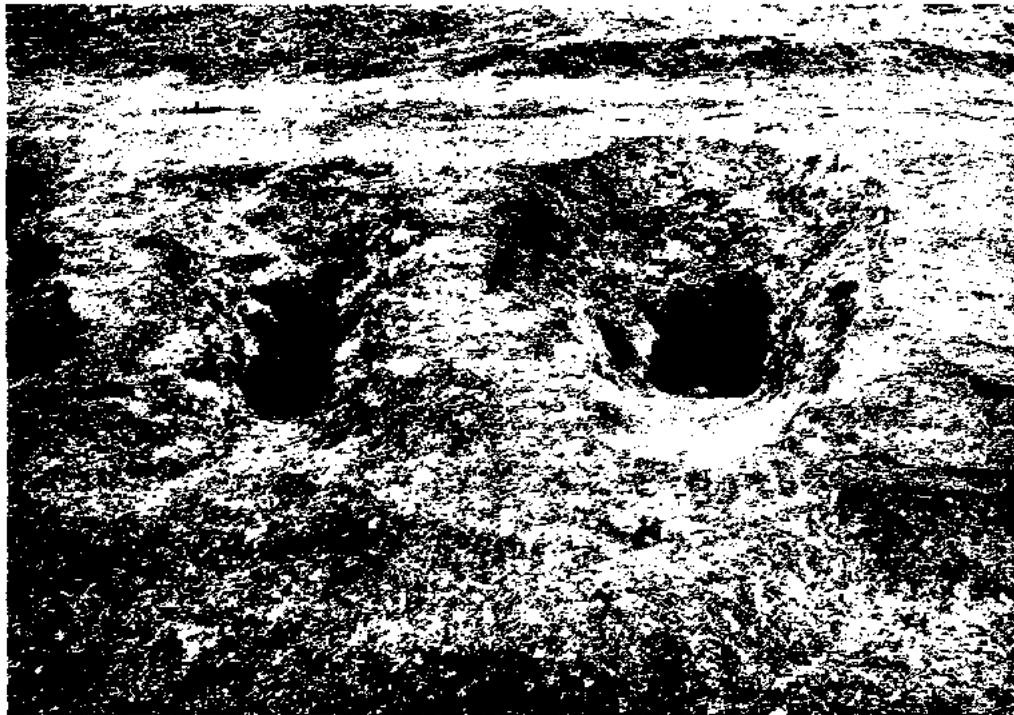
(1) 第 8 A - B 号横穴



(2) 第 8 B 号横穴



(1) 第9 - 10号横穴



(2) 第10 - 11号横穴



(1) 第12号横穴



(2) 第13・14号横穴



(1) 第13·15号横穴



(2) 第16号横穴



(1) 第17号 (1 - 2) 及び第19号 (3) 墳出土大刀

(2) 第16号 (4) 墳出土紡錘車及び
第18号 (5) 墳出土耳環





1



2



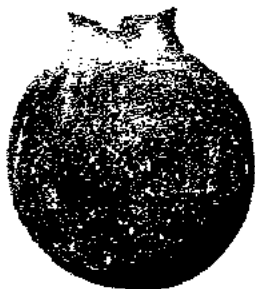
3



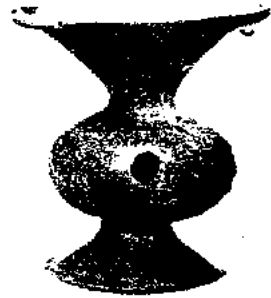
4



5



6



7



8



9



10

古墳群出土土器①



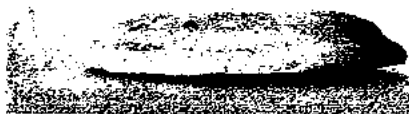
11



12



14



15



16



17



18



19



20



21



23



24

古墳群出土土器②



26



28



29



30



31



32



33



34



35



36

古墳群出土土器③



37



42



38



43



44



39



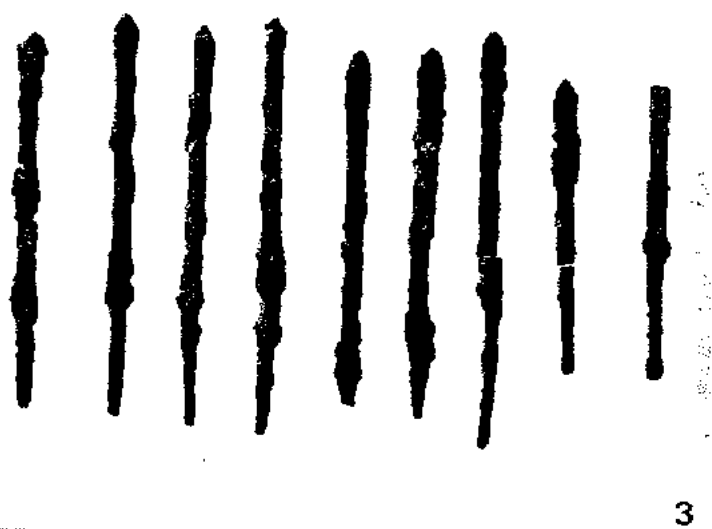
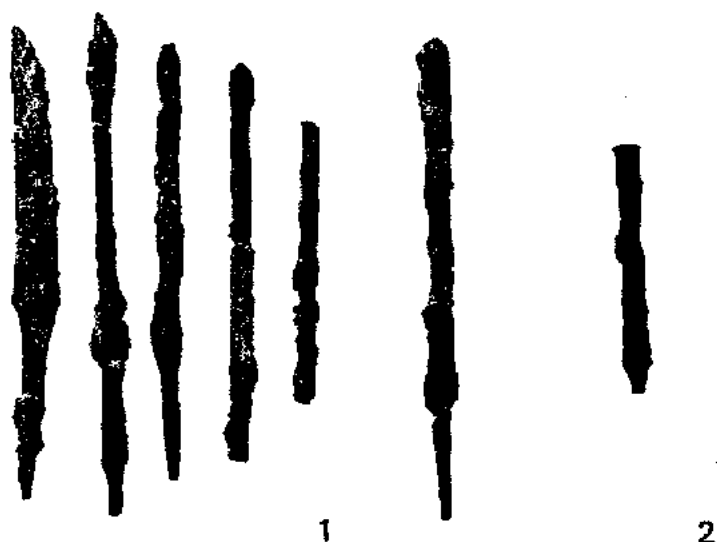
45



41



46



(1) 第3号 (1)、第4号 (2) 及び
第15号 (3) 横穴出土鉄簪



4



5

(2) 第5号 (4) 出土紡錘車及び
第6号 (5) 横穴出土耳環



47



48



49



51



52



53



54



57



58



59

横穴群出土土器①



60



66



61



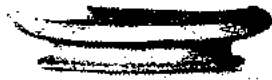
67



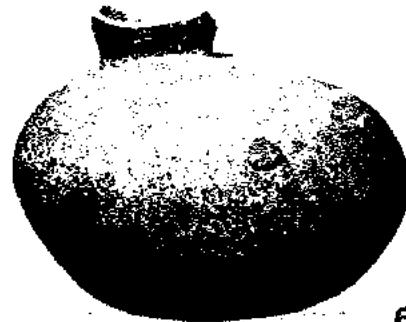
62



68



63



69



65



71



77



74



78



75



79



80



81



82



83



84



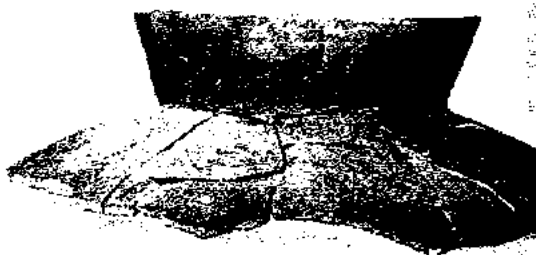
85



86



87



88

宗像町文化財調査報告書 第3集

昭和55年3月31日

発行 宗像町教育委員会
福岡県宗像郡宗像町東郷

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31